『J. ゴンダ：サンスクリット語初等文法』を読む[1]
―極微文献学への道―

金　沢　　篤

はじめに

新型コロナ禍でStayHomeが続く昨夏、伴侶に先立たれて施設でのひとり暮らしを余儀なくされていた母親が93才の生涯を閉じた。子供と言っても姉とわたしの二人だけだからそのそれぞれの伴侶と共に、最後まで近くにいて何かと介護してくれた叔母との計五人、親戚にも告げることなく文字通りの密葬を終え、遺骨を、菩提寺の墓地へ納めた。誰も住む者もいなくなり、文字通りの空家 śūnya-gṛha となった実家の片付けをし、家を解体すべく、仏壇を撤去する為の閉眼の儀、神棚を撤去する為の儀の日程も決まって、茫々と暮らしていると、実姉の許に、菩提寺のご住職から電話があったとかで、姉が電話をしてきた。親の姓を受け継ぐ息子ということで喪主を務めたわたしに、「法名を差し上げたいが、受けてもらえるだろうか」との申し出らしい。驚いたが、好奇心も働いて「もらえるものならなんでもいただきます」と応えたのである。母の葬儀の折に、母の法名に対するご住職の講釈を聞いたばかりだった。ああ、あんなふうに法名を考えるお寺さんも大変だなと思ったが、施設に入る前のほんの数年間とはいえ、母とは日常的に交流を持っていた若いご住職であるから、母に対するそれなりのイメージを持っていたのでそれなりの法名を思いついたのだろうが、母の密葬まで一面識もなかったわたしの法名をどうやって捻り出すのかと素朴に疑問を持ったのである。案の定、姉への電話で、ご住職はわたしの仕事や趣味などについてあれこれ訊いたそうで、自分よりかなり若い住職に勝手に適当な名前をつけられても困るなあ、とは思ったのである。法名と言ったら、通常は死後にいただくもので、亡くなった後の通り名であろう。何でも

[1] 本論攷は、わたしが責任を持つ『インド論理学研究』誌のブログにわたし自身が連載した【SHV03】(20200726)【SHV04】(20210118)【SHV05】(20210428)に対して改題加筆修正し、さらに若干の推敲を加えたものである。諒とされたい。

いいと言えばいいのだが、やはり、そのへんは多少は拘りたい。門徒の端くれだが、大小さまざまな派に分かれていて、当然ながら本山も異にする。わたしのところは、それらの中の極小の一派と言うべきで、本山を含めてお寺の数は20にも満たないのである。わが家の墓は、その本山の本殿隣りの墓地の片隅にある。お坊さんには仕事がら知り合いは大勢いるが、このような私事で親しく相談できる人は多くはない。そこで、東京で真宗のお寺のご住職をやっておられる若い友人に急遽電話をすることに。かれは丁寧に教えてくれた。「仕事とはいえ、この法名をつける作業はけっこう大変です、希望する名前があるなら、それを申し出た方が喜ばれるのでは」と。その言葉に励まされてわたしは直ちに候補を二つほど捻り出した次第。件の友人に候補を明かし相談した上で、「法名をいただけるということですが、出来たら、この二つのうちのどちらかでお願いします」とメールを出したのである。すると直ちに返事があり、「こちらの方にしましょう、閉眼の儀の折に、法名の授与も行わせていただきます」とあった。その法名というのが「極微院釋照篤」である。自分の法名を宣伝するのも気が引けて、法名をもらったという話はしたものの、他の誰にもどんな名前かは恥ずかしく言わずにきた。よくよく考えてみると、法名をもらうということは、僧籍を得て僧侶になることかも知れない。死後にもらうべきそれを生きている間にもらうということは、もういつお迎えがきても構わないということだと気楽に考えていたが、もしかしたら、わたしが望んだ結果世を棄てて仏門に入ったということになるのかも知れない。そう見られることを厭がる人がいるに違いないので、わざわざご住職は、こちらの意向をきいてきたのだと後になって気づいたという体たらく。ある意味では取り返しのつかないことを考えなしにしでかしたということになるのかも知れない、と遅まきながら気づいたということである。「剃髪をしなければいけません」と言われたならば迷うことなく辞退したところであるが、門徒の場合は、それも形ばかりのものであるらしい。これまで他人の法名など意識しないで過ごしてきたが、榊亮三郎というサンスクリット語の大先生の没後、その立派な門弟であるらしい足利惇氏氏が一度ならず書いておられるのが記憶にあった[2]。榊先生は真言宗を宗旨とする家庭に育ったということであり、『弘法大師と其の時代』といった著作も没後に刊行しておいでであるが、足利氏が伝えるその法名「崇學院釋清亮」か

[2] 榊［1947］167頁、榊［1980］9頁参照。

らすると、烏滸がましくもわたしのと同タイプのもののようにお見受けする。これは宗旨変えをされたということだろうか。

ところで、わが菩提寺のご住職は、わたしが案出したその法名を見て、直ちに天台宗の「一隅を照らす」という語[3]を連想されたようで、閉眼の儀に先だって行われた法名授与式では、その話をされたのである。この法名は、言うまでもなくわたしが自分の研究方法を言い立てる時に、さかんに用いる「極微文献学」micro-philologyを踏まえたものである。ちっぽけなささいなことがらにとことん拘っておこなう文献学的研究の態度・方法を言ったものだが、その成果にしてもたいていは「ちっぽけなささいなもの」に終わることを含意するものでもあると開き直って言ったものでもある。「最大の努力による最小の成果」を自身腐して言う言葉でもあるのだが、もう決して後戻りのできない年齢となってしまったばかりではない、法名の中にまでもその「極微」の二文字を刻み込んでしまった。金の糸で法名の刺繍された輪袈裟と共に、法名を刻んだ四角の印章までもがおまけについてきた。正直、畏れ多いやら恥ずかしいやら情けないやらである。

本論攷は、1975年に原実先生の「サンスクリット語文法」の授業で、刊行されたばかりのゴンダの（和訳本）文法書を教科書にして使って以来、今日に至るまで朝に夕に常に使い続けてきたゴンダ本文法書を起点としてあれこれ極微文献学を気儘に展開してきたわたしの、いわばわたし流の決算の始まりといったものである。コロナ禍第二年というべき今年度も例年通り「サンスクリット語初級」の授業を担当させてもらっているが、驚くなかれ受講者数は100人を優に越えているのである。密を避けるべく、目下、昨年同様、Google-Meetによるリモート授業を続けているが、つい先日未だ面識のない受講生の一人からメールが届いたので紹介しよう。

「いつもご指導いただきありがとうございます。／仏教学部1年の＊＊＊＊で

[3] ネット上には、「正確には、「一隅（いちぐう）を照らす、これ則（すなわ）ち国宝なり」という言葉です。一隅とは、片すみという意味。すなわち、この言葉は「片すみの誰も注目しないような物事に、ちゃんと取り組む人こそ尊い人だ」という意味です。誰もが注目するような表舞台で派手に活躍するばかりが尊いわけではありません。一人ひとりが自分のいる場所で一隅を照らしていくことこそ、私たちの本来の役目であり、それが積み重なることで世の中が出来上がっていきます。」を初めとして、実に様々な説明が横行しているようである。最澄の『山家学生式』の言葉と言われるが、わたしは、なるほどと思った。

す。／現在、自主勉強の一環としてサンスクリット語初等文法書の練習題と撰文の『ヒトーパデーシャ 2,5』を同時に取り組んでいます。／そこで気になったのですが、なぜ「ガンターカルナ」の綴りが、語彙集と本文とで相違があるのでしょうか。／語彙集には Ghaṇṭākaraṇa とあり、本文では Ghaṇṭākarṇa と r の後の a が抜けています。／このことについてご教示願います。／いつも楽しく授業を受けております、どうぞよろしくお願いします。」

受講生からこういうメールをもらえる教師は多分しあわせである。それに対してわたしは直ちに次のようなメールを返した。

「メール拝受。お目出度うございます。それは Ghaṇṭā-karṇa が正しいのです。語彙集の Ghaṇṭā-karaṇa は誤りです。これは Gonda 先生の誤りではなく、和訳者の鎧先生のミスです[4]。Gonda 先生の原書には、語彙としては Ghaṇṭā-karṇa-（鈴・耳）は立項されていないのです。ghaṇṭā- と karṇa- とが、別々に立項されているのを、和訳に際して、鎧先生が親切心から Ghaṇṭā-karaṇa-（Ghaṇṭā-karṇa- が正しい）を立項してしまったのです。学生のころわたしがそれを使って勉強した 1974 年に出た和訳初版から、間違って立項されてしまったのが、未だ修正されずに残っているのです。karṇa- は「耳」という名詞ですが、すぐ近くに karaṇa-「為すこと、行作」も立項されています。うっかり、r の後に a を入れてしまったのでしょう。Hitopadeśa 本文の方では ghaṇṭākarṇa で間違いはありません。どうぞがんばって勉強を進めてください。」

わたしは、このように誤植を見つけた学生には、「お目出度うございます」と祝福することにしている。「やりましたね、誤植一個、大発見です！」という意味。極微文献学の醍醐味ここに極まれり、である。

Ⅰ.『ヒトーパデーシャ』

そこで、『ヒトーパデーシャ』*Hitopadeśa* である。わたしの場合、サンスクリット語の勉強を始めて最初に出逢ったインドの古典作品が、これかも知れない。ゴンダ Jan Gonda の『サンスクリット語初等文法』（春秋社）の選文のⅠ、Ⅱに上がっていたのが、『ヒトーパデーシャ』の 2,5 と 3,3 である。それを知るとわたしは直ちに岩波文庫の『ヒトーパデーシャ』を購入した。金倉圓照・北川

[4] Gonda 本の英訳である Ford[1966] は、語彙に関しても底本 Gonda 本を尊重して原則、いじっていない。

秀則共訳の一冊だ。あまり話題にならないが、岩波文庫としては異例の二段組、最高の賜物だ。今でもこれが赤帯付きかカバー付きかで 100 円均一コーナーなどに並んでいたら、つい手にとって買ってしまう。副題が「処世の教え」となっているが、ただ扉にあるだけで、表紙にも背表紙にも奥付にも記載がないから、書誌的なデータとしてはもしかしたら残らないのかも知れない。今手にしているのは、「昭和四十三年一一月一六日　第一刷発行 © ／昭和四十八年一二月一〇日　第二刷発行」とあるものだ。「定価★★★」。当時は★一つが 50 円だったか？　50 円だったとしたら、定価 150 円。ハイライトが 80 円から 120 円に値上がりしたのが 1975 年のこと。

原実先生の授業の準備（ドラ･虎の巻）に活用しようという沙門しい魂胆だった。選文Ⅰの方は、2,4「第二話仲違いの挿話四」（112 頁）、Ⅱの方は、3,2「第三話戦争の挿話二」（155 頁）。ゴンダ本の 2,5 と 3,3 と微妙にずれていたが、元になっている刊本テキストの違いだろうと考えた。書いてある内容は概ね同じだった。ゴンダ本には、『ヒトーパデーシャ』の元本についての記載がない。岩波文庫本には、底本としたテキストなどについても詳細な記述があったが、1887 年刊行のものと知って、入手困難と端から諦めてしまった。でも、サンスクリットの勉強を始めて一年ほども経つ頃になると、わたしも人並みに生意気にもインドの本をインドの書店に注文して取り寄せる方法を学ぶようになったが、最初に入手した『ヒトーパデーシャ』は、カーレーのもの。ご存じモチラル書店刊の便利な英訳付きの復刻本である。オリジナルは 1896 年に刊行されたらしいが、後にカーレー自身の英訳が併録されるようになった。わたしが手にしたのは薄茶色の本で、1976 年にデリーでリプリントされたとあり、12 ルピーと印刷されているが、当時いくらだったのか？　おそらく送料など（東京銀行などに出向いて draft を作ったりする手数料も？）の方が高くついたはずだ。それは今も手許にあって重宝しているが、それだと、2,4（p.45）:英訳（p.52）、3,2（p.63）：英訳（p.73）。挿話番号は岩波文庫本と同じで、やはりゴンダ本とは違う。

古典の現代語訳を入手した場合には、翻訳の底本となっている原テキストも併せ入手すべきとの認識を新たにする。岩波文庫本の底本ピーターソン Peter Peterson 本を手にした時の感動は忘れない。むろん復刻本だが、カーレー本と同様、チープな印象。デリーのバラティーヤ・ブック・コーポレーションによる復刻本で、1999 年に出たばかりのほやほやのペーパーバック。200 ルピーと

あった。中表紙には、Nārāyaṇa: Hitopadeśa (Complete)（Text, with Introduction and Notes in English) Edited by Peter Petersonとあるだけで、本当に粗末な作りで、復刻の原著についての言及なども一切ないのである。通常の奥付（中表紙裏）の次頁は、“Dedicated to F. Max Müller” との献辞頁、それに続いては、“P. Peterson. University Library, Bombay, 1st January, 1887.” との署名のある “Preface”（pp.i-xiv)、そして、堂々たる “Introduction”（pp.1-61）があり、その後に、詳細な異読などに関する脚註のついたデーヴァナーガリーによるテキスト頁（pp.1-161）があり、その後に、詳細な "Notes” 頁（pp.162-259）が置かれているのである。…

《ヒトーパデーシャ　3,3》

Asti Hastināpure **Viśālo** nāma rajakaḥ. tasya gardhavo ’tivāhād durbalo mumūrṣur abhavat. tatas tena rajakenāsau vyāghracarmaṇā pracchādyāraṇyasaṃnidhānasasyam adhye muktaḥ. tato dūrād vyāghrabuddhyā tam avalokya kṣetrapatayaḥ satvaraṃ palāyante. atha kenāpi sasyarakṣakeṇa dhūsarakambalakṛtatanutrāṇena dhanuḥ sajjīkṛtyānatakāyenaikānte sthitam. taṃ cādūre dṛṣṭvā sa gardabhaḥ puṣṭāṅgo jātabalo gardabhīyam iti jñātvā śabdaṃ kurvāṇas tadabhimukhaṃ dhāvitaḥ. tatas tena rakṣakeṇa gardabho ’yam iti śabdān niścitya līlayā vyāpāditaḥ.（鎧［1974//1989］120 頁）

「ハスティナープラに**ヴィシャーラ**（Viśāla）[5] という名前の洗濯屋がいました。かれの驢馬は過度運搬（ativāha）のせいで力弱り（durbala)、死なんばかり（mumūrṣu）になりました（abhavat)。それで、その洗濯屋によって、その［驢馬］は、虎皮で偽装された後に（pracchādya)、森（araṇya）の近く（saṃnidhāna）の穀物［畑］の中に、解き放たれました（mukta)。すると、遠方より（dūrāt)、虎［である］との知（buddhi）を以て、その［驢馬］を認めた（avalokya)、田畑の持ち主（kṣetra-pati）たちは、速やかに（satvaram）逃げました。その時、一人の、灰色の（dhūsara）羊毛の衣地（kambala）で作られた身体（tanu）［防護の］甲冑（trāṇa）を［まとった]、穀物［畑］の番人が、弓（dhanus）に矢を番え（sajjīkṛtya)、体をかがめて（ānata-kāya)、［その畑の］一角に、潜んでいました。すると、その［番人］を、遠からぬところで（adūre）認めた結果（dṛṣṭvā)、肢体を養生し（puṣṭa-aṅga)、力を取り戻した（jāta-bala)、そ［の驢馬］は、「こ

[5] 他刊本のテキストとの識別ポイントを意識して、訳文の中に敢えて適宜原語を付す。

れは、雌驢馬だ」と知って（jñātvā）、声をあげつつ、その［番人］に向かって（tad-abhimukham）、突進しました（dhāvita）。その結果、［その］声（śabda）によって、「こやつは、驢馬だ」と判断した（niścitya）、その番人によって、［その驢馬は］、あっけなく（līlayā）殺されてしまいました[6]。」（拙訳）

《ピーターソン本》

asti hastināpure **viśālo** nāma rajakaḥ / tasya gardhavotivāhād durbalo mumūrṣur abhavat / tatas tena rajakenāsau vyāghracarmaṇā pracchādyāraṇyasaṃnidhānasasya madhye muktaḥ / tato dūrād vyāghrabuddhyā tam avalokya kṣetrapatayaḥ satvaraṃ palāyante / atha kenāpi śasyarakṣakeṇa[7] dhūsarakambalakṛtatanutrāṇena dhanuḥ sajjīkṛtyānatakāyenaikānte sthitam / taṃ cādūre dṛṣṭvā sa gardabhaḥ puṣṭāṅgo jātabalo gardabhīyam iti jñātvā śabdaṃ kurvāṇas tadabhimukhaṃ dhāvitaḥ / tatas tena rakṣakeṇa gardabhoyam iti śabdān niścitya līlayā vyāpāditaḥ /（Peterson［1887//1986/1999］, p.90, ll.5-12[8]）

わたしが今回特に気に懸けていたのは、ゴンダの『サンスクリット語初等文法』の巻末「選文」Ⅰ、Ⅱとしてあがっている「ヒトーパデーシャ 2,5」、「ヒトーパデーシャ 3,3」は、果たして誰のテキストによるものか、ということであった。著者のゴンダが明示していないのではわからないのも当然。『ヒトーパデーシャ』の種々刊本を見てみたが、結局、これだというのが特定出来ないのである。どちらも有名な挿話であるから、ゴンダ自身が、サンスクリット語の初学者用に、適当にアレンジしたものとも考えられる。＜章＞と＜挿話番号＞だけは、有名な刊本のそれを利用しているけれど、その中身の方は、ゴンダ自身がでっちあげたものかも知れないと思ったのである。「選文」Ⅰの方は置くとして、今はⅡの方にだけ限定して考えることにする。そうすると、それは、金倉・北

---

6 ピーターソン自身は『ヒトーパデーシャ』の訳文を遺していないように思われるが、詳細な “Introduction” の中に梗概があるので参考までに引く。“A washereman, finding that his old donkey could do no more work, sewed him up in a tiger’s skin, and let him loose in the neibouring fields. All who saw him fled ; the ass grazed at will. But one more hardy villager, donning armour made of an ass’s skin, and crouching down on all fours with bow and arrow in hand, lay in wait for this tiger, who was ravaging his fields. The ass took this to be a female of his own kind, and brayed a welcome to her. Upon which the man, recognising the ass by his bray, slew him. ”（pp.36-37）

7 sasya が śasya となっている点を除いては、全同である。

8 テキストの編者 Peterson によっては、第三話中のこのエピソードに対して、挿話番号は付されていないが、金倉・北川［1968］では、3,2 となっている。

川［1968］の訳文にジャストフィットする。そして、それが底本としている、1887 年刊行のピーターソンによるテキストと 99.9% 一致するのである。残る 0.1% は、avagraha 記号（アポストロフ）が使われている（ゴンダ本）か、使われていない（ピーターソン本）か。2 回出て来る sasya（穀物）の 2 回目のものの語頭に硬口蓋音 ś が使われている（ピーターソン本）か、使われていない（ゴンダ本）か。事実上、両者は全く同一であると言い得るほどである[9]。そうか、ゴンダは、挿話番号はともかくとして、その『初等文法』の「選文」の『ヒトーパデーシャ』は、金倉・北川［1968］と同じピーターソン本に依ったのかと言いたくなるのである。だが、「選文」Ⅰの方は、これがまた、ピーターソン本とは相当違ったものとの印象である。Ⅱの方は、ピーターソン本のテキストがゴンダの眼鏡にかなったのでそのまま採用されることになった、と言う他ないのである。したがって、45 年も前に、ゴンダ本でサンスクリット語の学習を始めたわたしとしては、その＜虎の巻＞の一冊として、いち早く金倉・北川［1968］を購入したのは、正解だったということである。ならば「選文」Ⅰの『ヒトーパデーシャ』の方は？

その当時は夢にも思わなかったのであるが、今、しげしげとピーターソン本を手にして眺めていると、ふとこんな考えが浮かんだ。『ヒトーパデーシャ』のテキストも翻訳もやまほど持っていて、見ているけれど、この「洗濯屋と虎の皮をまとった驢馬」の挿話がやはり面白い、サンスクリットの初学者には恰好の「選文」。だが、テキスト中ボールド体にした洗濯屋の名前、授業でも毎年読んでいるせいか、もうこの「ヴィシャーラ」viśāla という名前が頭にこびり付いているのであるが、洗濯屋の名前が、この「ヴィシャーラ」になっているのは、種々刊本中では、何と 1887 年に刊行されたピーターソン本だけなのである。この挿話の洗濯屋の名前が「ヴィシャーラ」viśāla となっているのは、ピーターソン本とそれを底本とした金倉・北川［1968］と、そのピーターソン本から「選文」Ⅱを考案したゴンダの初等文法書の三冊だけなのである[10]。ピーターソン本を底本とした『ヒトーパデーシャ』の全訳本は、ただ金倉・北川［1968］だけしかないのではないか。これは如何にも不思議である。『ヒトーパデーシャ』

[9] ゴンダ本のテキストの特定にあたっては、洗濯屋の名前が決め手になったと言えるかも知れない。

[10] Ainapure［1908］には、その挿話は＜ 3,2 ＞としてあるが、“vilāso” の本文の読みに対して脚註 1 には、“viśālo nāma /” という読みのあることが記されている（p.85）。

のテキスト＆翻訳の最新巻の一冊と言い得る、例えば、Clay Sanskrit Library の一冊、Törzsök［2007］は、挿話番号 3,2 で、「ヴィラーサ」vilāsa（pp.342-343）である。知らない人なら、「名前、うっかり間違えたのでは？」などと突っ込みを入れかねないのでは（ダイアクリティカルマークを使わない場合には、文字通りのアナグラムになっている）。ちなみにわたしが最初にゲットした Kāle［1896,1910//1976］だと、やはり「ヴィラーサ」vilāsa（Text:p.63, Tr.:p.73）。

金倉・北川［1968］巻末の「底本について」の結びのことばは以下の通りである。

「Hitopadeśa は版によって読みが様々であるが、特に Peterson の版は古い写本にもとづいているので、一般に流布している読みとは異なる点が多い。一般的に言って Peterson 版は詩句の数も少く、散文の部分も叙述が簡潔であり、Hitopadeśa の原型に近い。」（299-300 頁）

挿話番号に違いがあるようだが、また「版によって読みが様々」であるそうだが、大きく分けて、以下の二種類になるようだ。ゴンダの「選文」Ⅰ、Ⅱのそれぞれを、「2,5 と 3,3」にするものと「2,4 と 3,2」にするもの。原文出版や翻訳出版に目次が付されているとわかりやすい。同じ二つの挿話が、「2,5 と 3,3」か、それとも「2,4 と 3,2」かである。例えば Kāle［1976］は、後者だが、同じカーレーの英訳を使っている Shripati Awasthi［2005］は、前者である。金倉・北川［1968］も Max Müller［1865］も後者だ。Wilkins［1787//1885］、Schlegel&Lassen［1829-30］、Max Müller［1844］、Johnson［1847］［1848］が前者の代表。

洗濯屋の名前は「カルプーラヴィラーサ」Karpūravilāsa だ、これなら「ヴィラーサ」Vilāsa という名前の洗濯屋もわかる。だが、ピーターソンの場合は、「ヴィシャーラ」Viśāla である。ゴンダ本も、金倉・北川［1968］もこの「ヴィシャーラ」Viśāla である。

ピーターソンは、註記して（Notes）以下のように記している。

“Page 90. Line 5. Viśāla is the name in all our MSS. Edd. Vilāsa or Karpūravilāsa.”（p.232）

だが、この註記を解読するのにもテクニックを要する。テキストの p.90, l.5 にある洗濯屋の名前としてある “Viśāla” に対する註記なのである。「われわれが使用した全ての写本（MSS. = A、B、C、N という四つの写本）には、Viśāla とある」ということを言いたいのである。そして、「われわれが参照した全ての刊本（Edd.）には、Vilāsa か Karpūravilāsa とある」ということを言い

たいのである。つまり、ピーターソンが「テキスト校訂に使用した 4 本の写本には、すべて、Viśāla とあるので、われわれはその読みを採用した」と言っているのである。既刊のテキストに「その読み Viśāla」を採用しているものは一つもないと言っているのである。わたしは、これをとても不思議な事態だと考えている。モニエルの辞典にカルプーラヴィラーサ Karpūravilāsa を立項し、「洗濯屋の名前」とし、『ヒトーパデーシャ』を上げている。当然ながら、Schlegel&Lassen［1829-30］のテキストを踏まえたものである。ルヌーなどによる辞典にも同じくカルプーラヴィラーサ Karpūravilāsa は立項されていて、「ある洗濯屋の名前」と記載されている（p.180）。もちろん、ベートリンク＆ロートの大辞典にもこのカルプーラヴィラーサ Karpūravilāsa は、vilāsa の項目中に『ヒトーパデーシャ』などを典拠とする「ある男の名前」として探し出せる（vi, p.1167）し、その大辞典に基づいたと謳っているカッペラーの辞典には、カルプーラヴィラーサ Karpūravilāsa が立項されていて、「ある洗濯屋の名前」と出ている（p.111）。また、モニエルが有名な『インドの智慧』*Indian Wisdom* で “excellent edition”（p.516）と言及している Johnson［1847］［1848］では、ヴィラーサ Vilāsa である。マックス・ミュラーが英語版 Müller［1864］で準拠したと言っている Lakshami Nārāyanan Nyālankār［1830］もヴィラーサ Vilāsa である（p.308）。ただピーターソンだけが、ヴィシャーラ Viśāla であり、あろうことか、ゴンダ先生は、『サンスクリット語初等文法』の「選文」Ⅱに、ヴィシャーラ Viśāla とある、そのピーターソンのテキストを採用しているのである。ならばゴンダ本の「語彙」は？と改めて伺ってみると、なんとなんと、Viśāla は立項されていないではないか。代わりに、「Viśala- m. 人名」（178 頁）とある。誤植、見つけ！　その勢いで、私蔵の初版を見ると、鎧［1974］の初版本には、その項目自体が立項されていない。ゴンダによって認可された英語版たる Ford［1966］の Glossary「語彙」にも、やはり立項されていない[11]。最古の『ヒトーパデーシャ』本の一つ、Wilkins［1787］は 3,3 で Vilāsa（p.173）である。むろんもう一つの逸話の方は 2,5。Lancereau［1855］は、3,3 で “Karpoûravilâsa”（125 頁）。もう一つは 2,5。

[11] ゴンダ本の底本となった原書第 3 版、Gonda［1948］には、Viśāla も Viśala も立項されていない。鎧先生が和訳に際して親切心で改版の折に追加した項目の一つだが、そこにも不正確な Viśala という項目を立ててしまったということである。なお、viśālākṣa「目の大きい」はゴンダ本にも Gonda［1948］にも、立項されている。

これに関連した話としては、viśāla という言葉の意味である。ピーターソン本『ヒトーパデーシャ』では、栄えある洗濯屋の名前となっているのだが、その挿話 3,3 ないし 3,2 に一つ先立つ挿話、すなわち 3,2 ないし 3,1 の冒頭部が以下のようにあることは、わたしとしては、とても意味深いように思われるのである。そもそも viśāla という語は、形容詞で「大きい」という意味の語である。わたしもかつて金沢［2007］で「眼の美しさ」を表わす「大きな眼」（viśāla-akṣa）などの表現中の形容詞としての viśāla に言及したことがある。

asti narmadātīre parvatopatyakāyāṃ **viśālaḥ** śālmalītaruḥ /（Peterson［1887//1986/1999］, p.88）

「ナルマダー河の岸に沿った山の麓に、**大きな**シャールマリー樹がございました。」（金倉・北川［1968］153 頁）

金倉･北川［1968］だと、3,1 挿話の書き出しの一文。訳文ではそこにヴィシャーラ viśāla という語が出て来ることはわからない。問題の「ハスティナープラに**ヴィシャーラ**という名の洗濯屋がいた。」（155 頁）と始まる挿話は、3,2 である。片や「大きな」viśāla（男性単数主格）、片や洗濯屋の名前の「ヴィシャーラ」viśāla（男性単数主格）である。これは偶然にしては出来すぎた話のようにも思われる [12]。ピーターソンが 4 つの写本とそれまでの刊本を付き合わせて読んでいる間に、洗濯屋の名前を読み取る上で、そのあたりの誤操作が起こった可能性もあるのではないか [13]、というのがわたしの今回の「ゲスの勘ぐり」である [14]。当然ながら、ヴィシャーラ viśāla は、有名なある国（王）の名前である。

[12] だが、こうした『ヒトーパデーシャ』などの＜挿話の寄せ集め＞みたいな説話物語作品の場合、その物語に用いられる固有名詞は所詮は語り手の語りの進行中の記憶と連想などから自由に発想されたものという視点も重要かもしれない。詳論は避けるが、Peterson［1887］の 3,3(or 3,2）では、洗濯屋の名前として用いられなかった “karpūra-” だが、“karpūrapaṭa”（p.51）という名前の洗濯屋は登場するし、“karpūra”（p.39）は言うまでもなく、“karpūratilaka”（p.40）、“karpūradvīpa”（p.87）、“karpūrakeli”（p.112）、“karpūramañjarī”（p.112）なども登場するのである。

[13] むろん、ピーターソン自身ではなくピーターソンが参照した『ヒトーパデーシャ』の諸写本の作り手たちに起こった錯誤かも知れない。

[14] 直ちに Blatt［1930］に参究すべきと考えたが、現在の新型コロナ禍のせいもあって、努力したものの、適わなかったのは遺憾である。このヴィシャーラという名前の洗濯屋には、ゴンダの『初等文法』で最初に出逢い、それとは別テキストの和訳の筈の金倉･北川［1968］でも、すっかり馴染みとなり、その和訳の底本である Peterson［1887//1986/1999］でも、しっかりと確認したのであるから、これまで、この洗濯屋の名前を奇異であるなどとは少しも

またヴァイシャーリー vaiśālī とはその王女の呼称であり、都城の名前でもある。ゴンダが自身の『初等文法』の「選文」に『ヒトーパデーシャ』の二つのエピソードを収録しようとした際に、その一つの登場人物である洗濯屋の名前がヴィシャーラであるピーターソンのテキストを選んだ理由をわたしは是非知りたく思っているのである。ゴンダ先生の謦咳に接し得たはずの鎧先生には、ご存じならそのような事情をこそ詳しくうかがいたく思うのである[15]。だが、今となってはすべてが夢の又夢、遅れて来たわたしなどは、結局はあれこれ遺された諸文献をせっせと渉猟して、ただ想像をたくましくするしかないのだろう、とやや悔しく思うのである。ゴンダ先生が、その初等文法書の「選文」に、もう一つの『ヒトーパデーシャ』の「選文」Ｉを収録するにあたって依拠したテキスト**も、結局はピーターソン本だった**と考えざるを得ない[16]ことの論拠を示す意味で、そのエピソードのテキストを以下に並べて引いて、本節の結びとしたい。

《ヒトーパデーシャ　2,5》

Asti Śrīparvatamadhye Brahmapurābhidhānaṃ nagaram. **tacchailaśikhare**[17]

思わなかったのである。わたしの知る限り、その洗濯屋の名前について論及した者はいないのではないか。比較説話物語研究の一つの重要な分野を形作るはずの「筋書きの類似とその変遷」「筋書きを具体的に担う固有名詞の変化」問題に、もしかしたら一つの有意義な材料を提供出来るのではないかとふと考えた次第である。

[15] 鎧先生は当然まだご存命だとわたしは考えていたが、世間知らずのわたしである。先生が 2015 年に身罷れたことをわたしは StayHome 後のつい先日知ったのである。わたしがまだ学生のころ印哲研究室などで本を探して？精力的に動き回るそのおしゃれなお姿を何度もお見かけしたことがある。

[16] とは言いながらも、如何に『初等文法』とはいえ、独立性の高い練習問題ならともかくも、明確な名称を持った「選文」に対して、その典拠となるテキストに対して改変を加えた場合に、編著者が何一つコメントしないということは考えられないのである。

[17] この 2,5 を、挿話番号の齟齬は別にして Peterson 版と断じかねるのは、この複合語のせいである。わたしは、この複合語を持つ『ヒトーパデーシャ』の刊本を特定出来ていないのである。ゴンダの選文の tat と śaila と śikhare による複合語 tac-chaila-śikhare「その山の頂き」に近い読みを持つテキストは Johnson［1847］版。そこには “tatra śaila-śikhare”（p.47）とある。Johnson［1847］に依拠したと言う Ballantyne［1892］には、“atra śaila-śikhare”（p.63）とある。Böhtlingk［1845］は別物、Böhtlingk［1877］と Garbe［1909］の 2,5 が、この Johnson［1847］を採用している。ゴンダは、この Johnson［1847］のこの複合語を Peterson［1886］に適用して、なおかつ、その、やや冗漫と思われる “maṇḍalapūjāgaṇacakrādyācāryagauravaṃ darśayitvā” の部分を削除して、自身独自のすっきりした 2,5 を作ったのだろうか？　基本的には、ゴンダ本の『ヒトーパデーシャ』は、Peterson 本だとわたしは考える。Johnson

Ghaṇṭākarṇo nāma rākṣasaḥ prativasatīti janāpavādaḥ sadā śrūyate. ekadā ghaṇṭām ādāya palāyamānaḥ kaścic cauro vyāghreṇa vyāpāditaḥ khāditaś ca. tatpāṇipatitā ghaṇṭā vānaraiḥ prāptā. te ca vānarās tāṃ ghaṇṭāṃ sarvadaiva vādayanti. tatas tannagarajanaiḥ sa manuṣyaḥ khādito dṛṣṭaḥ. pratikṣaṇaṃ ca ghaṇṭāvādaḥ śrūyate. anantaraṃ Ghaṇṭākarṇaḥ kupito manuṣyān khādati ghaṇṭāṃ ca vādayatīty uktvā janāḥ sarve nagarāt palāyitāḥ. tataḥ kuṭṭanyā vimṛṣya markaṭā ghaṇṭāṃ vādayantīti svayaṃ parijñāya rājāvijñāpitaḥ: deva yadi dhanopakṣayaḥ kriyate, tadāham enaṃ Ghaṇṭākarṇaṃ sādayāmi. tato rājñā dhanaṃ dattam. kuṭṭanyā ca svayaṃ vānarapriyaphalāny ādāya vanaṃ praviśya phalāny ākīrṇāni. tato ghaṇṭāṃ parityajya vānarāḥ phalāsaktā babhūvuḥ. kuṭṭanī ghaṇṭāṃ gṛhītvā samāyātā sakalaloka-pūjyābhavat.（鎧［1974//1989］119 頁）

「シュリーパルヴァタ［山］の中ほどに、ブラフマプラという名前（abhidhāna）の町がありました。「その山の頂（śaila-śikhara）には、ガンターカルナ（鈴耳）という名前の羅刹［鬼］が住んでいる」との人々の噂（apavāda）がいつも（sadā）聞かれる［ようになったのです。］ある時、鈴を奪って逃げつつあった一人の盗人が、虎に殺されて食べられてしまったのです。その［盗人の］手から落ちた鈴が、サルたちの得るところとなりました。そして、そのサルたちは、その鈴をひっきりなしに（pratikṣaṇam）鳴らすのです。そして、その［ブラフマプラ］町の住人たちによって、その［盗人の］男が[18]食べられているのが、見出されました。その上、鈴鳴りが絶えず（sarvadā^eva）聞かれるのです。直ちに、「ガンターカルナ［という羅刹鬼］が、怒って、男たちを食べ、そして鈴を鳴らすのだ」と言って、人々はすべて町から逃げてしまいました。すると一人の遣手婆（kuṭṭaṇī）が考えを巡らし（vimṛṣya）、「サルたちが鈴を鳴らしている」と自ら（svayam）はっきりと知り（parijñāya）、王に申し出たのです。「王様、もし［あなたが］出費（dhana-upakṣaya）を厭わないならば、その時には、わ

版の和訳と称する平松［1956］のその箇所の和訳は、ゴンダ本の拙訳と同意の「かの山の嶺（いただき）には、」（160 頁）とある。

[18] 同じ読みに対して金倉・北川［1968］は、「こういうわけで、町の人々は人間が何かに食われているのを見つけていましたし」（112 頁）という訳を与えている。テキストには “sa manuṣyaḥ” とあるのでやはり定冠詞／指示代名詞を反映させて「その人間が」とすることは重要であろう。金倉・北川訳は、sa のない別テキストの英訳などを参考にして和訳を模索したのかも知れない。

たしが、あのガンターカルナ奴を退治しましょう。」と。そして、王によって［その遣手婆に対して］お金（dhana）が与えられました。遣手婆は、自らサルたちの好物の果物を持って、森の中に入って行き、［その］果物をばらまきました。その結果、サルたちは、［その］鈴を完全に見棄てて（parityajya）、［今度は］果物に熱中（phala-āsakta）するに到りました。遣手婆は、鈴を手にして［町に］戻り、すべての世人の供養を受ける身（pūjya）となったのでした。」（拙訳）

《ピーターソン本》

asti śrīparvatamadhye brahmapurābhidhānaṃ nagaram. **tatpradeśaśikhare**[19] Ghaṇṭākarṇo nāma rākṣasaḥ prativasatīti janāpavādaḥ sadā śrūyate. ekadā ghaṇṭām ādāya palāyamānaḥ kaścic cauro vyāghreṇa vyāpāditaḥ khāditaś ca. tatpāṇipatitā ghaṇṭā vānaraiḥ prāptā. te ca vānarās tāṃ ghaṇṭāṃ sarvadaiva vādayanti. tatas tannagarajanaiḥ sa manuṣyaḥ khādino[20] dṛṣṭaḥ. pratikṣaṇaṃ ca ghaṇṭāvādaḥ śrūyate. anantaraṃ ghaṇṭākarṇaḥ kupito manuṣyān khādati ghaṇṭāṃ ca vādayatīty uktvā janāḥ sarve nagarāt palāyitāḥ. tataḥ kuṭṭanyā vimṛṣya markaṭā ghaṇṭāṃ vādayantīti svayaṃ parijñāya rājā vijñāpitaḥ: deva yadi dhanopakṣayaḥ kriyate, tadāham enaṃ ghaṇṭākarṇaṃ sādayāmi. tato rājñā dhanaṃ dattam. kuṭṭanyā ca **maṇḍalapūjāgaṇa-cakrādyācāryagauravaṃ darśayitvā** svayaṃ vānarapriyaphalāny ādāya vanaṃ praviśya phalāny ākīrṇāni. tato ghaṇṭāṃ parityajya vānarāḥ phalasaktā[21] babhūvuḥ. kuṭṭanī ghaṇṭāṃ gṛhītvā samāyātā sakalalokapūjyābhavat[22]. (Peterson

[19] この tat-pradeśa-śikhare の pradeśa の代わりに「山」を意味する śaila を用いると、ゴンダ本の tac-chaila-śikhare になる。初学者の連声の勉強にもかっこうの材料となる、ゴンダ先生はその点を考えたのではないか。“tac-chikhara-pradeśe” との読みを与える刊本もある（Kāle［1896//1910/1976］, p.45）。

[20] 組み直し･復刻に際して侵入した誤植である。Peterson［1887］には “khādito" (p.64) とある。

[21] 同じく組み直し･復刻に際して侵入した誤植である。Peterson［1887］には “phalāsaktā” (p.64) とある。

[22] Peterson［1887//1986/1999］は、組み直し・復刻に際しては、頁と行に齟齬が起こらないように、注意深く遂行されているように見えるが、こうした人為的粗相も散見する。Peterson［1887］にあった、巻末の（pp.89-96）有益な「詩節の第一パーダ索引」Index of First Lines が、残念ながらこの復刻本には欠落していて、ない。さらに、書物の後半部を成している “Notes” は、Peterson［1887］では前半部とは独立の頁番号が付されていたのが、前半部との通し番号になっていることも申し添えておきたい。金倉・北川［1968］の底本である貴重な Peterson［1887］を手軽に入手出来るという点ではまことに有難い復刻本では

［1887//1986/1999］, pp.64-65）

Ⅱ.『パンチャタントラ』 化身と憑依、またはゴンダの不覚？

本節は『パンチャタントラ』*Pañcatantra* である。度々で恐縮だが、ゴンダ Jan Gonda の『サンスクリット語初等文法』を教科書として毎年サンスクリット語初級の授業を担当させてもらっている。他の文法書を使ったことがないので比較することはできないが、とにかく鎧淳氏の訳したゴンダのこの文法書が好きだ。特に、古典に取材しているはずだが典拠の明かされていない数々の「練習題」が楽しい。aputrasya gṛhaṃ śūnyam.（102 頁）という練習題Ⅰの 13 などは、もう何度も何度も話題にしている。本誌の昨年号（第 51 号）には、その練習題を山車にして「aputra 考、ベートリンクの不覚？」、つまり金沢［2020］を書いた。ゴンダがサンスクリットの初学者のために用意したサンスクリット語の短文が練習題であるが、どのようにしてゴンダがその練習題を捻り出したかを詮索する楽しみを言うのである。例えば、練習題Ⅴの 1. na nāryo vinerṣyayā.（105 頁）がある。vinā と否定辞の na を使った素敵な文。かと思うと、eva をうまく使った 2.striyo nisargād eva paṇḍitāḥ.（105 頁）が続く。あまりに大らかでつい笑ってしまう。

サンスクリット語は、なくても意味が伝わるものなら、それなしで済ます、簡潔・節約を旨とする言語のようである。逆に言えば、そこに使われている語は、すべて重要な意味を担っていると言えるのである。練習題に出る短文には、指示代名詞や定冠詞の類いが使われていないものが多い。本来ならば、文脈の助けがあるから、それらが使われていないから一般的な命題である、と考える必要はない。練習題の短文は、元々は、ちゃんとした文脈の中に置かれたものであり、文法書の編著者が、適宜そういうところから抜き出して、練習題として採用したといったものである。したがって、練習題は、文法的な同定作業を行う対象であると同時に、現代語に翻訳する対象でもあるから、時に訳文の意味が明確にならない場合が多々あるのである。したがって、サンスクリット語の初学者には、釈然としない訳文に不満を洩らすことがあり、それもひとえに教師の力不足の致すところと謝罪してしまうことが時にあるような気がする。教師の側は釈明にしどろもどろなのだが、仮に教師がサンスクリットの古典に

あるが、極微文献学者には、やはりオリジナルは手放せないということになる。

通暁している立派な教養人なら、臆することなく平気の平左で自在に講釈を垂れて学生を煙に巻くことができるはずである。

サンスクリット語では、なくても済むものは省略される。省略されるものの中には、いわゆる句読点までもが含まれる。句読点というのは書き手が用意するものではなく、読み手が必要から設定するものだ、とか。練習題では、編著者が、サンスクリットの初学者のことを慮って、句読点など色々飾り付けていてくれるけれど、実際の書き手の方は少しも親切ではない。なくて済むものはなしで済ますのである。文は読解しようとする読み手が設定するものだ。サンスクリットの文を成立させる条件とは、「主格の語があるか、または定動詞があるかである」などと聞いたようなことを口にしてみる。aで終わる名詞の曲用を説明する表から成る §21 の終わった後に用意されている練習題 I の最後の 21 番目の文は、最初の難関ではないだろうか。この練習題には、なんと「主格の語」も、「定動詞」もどちらも出てこないのである。否定辞の na と副詞と、処格と呼格と属格だけ。これでコミュニケーションの最小単位である文と言えるのだろうか。ゴンダ先生は、またなんとやっかいな練習題を突きつけてくれたものだ。主語もなければ定動詞もない、そんな文は文と言えないのでは。いや、そういう場合には、「主語は何でもいいということである」と、未熟な教師は慌てて説明する。何でもいいのだから、仮に、それを X［主格］としよう。そして訳文を作ってみる。読点の二個の「カンマ ,」が嬉しい。文の構造がわかって有難い。

21.na tathā svagṛhe, mitra, yathā tava gṛhe sadā.（102 頁）

yathā と tathā は関係副詞。yathā の方が従属節、tathā の方が主節の複文と説明した上で、ひとまず次のように訳文を作ってみる。

「友よ、あなたの家において、［X：万事が、］常に、［好ましいものとして存在する］、そのように（yathā ～ , tathā ～）、自分の家（＝わたしの家）において［X：万事が、好ましいものとして存在する、ということは］ない。」（拙訳）

いったいなんのことか。学生は、きょとんと聞いているだけである。例えば X に「食事」を入れてみる。いや「入浴」でも「睡眠」でも何でも思いつく限りのものを入れてみたらいいのでは、と教師は言う。そしてこの［複］文が、どういう状況で発せられたものであるかを考えてみよう、と教師は偉そうに言う。どうやら、友人関係にある A と B の間で発せられた文のようだ。A は B の客人である。A が発話者、B が「友」とも「あなた」とも呼ばれる聴取者。

さて、ゴンダ先生は、この練習題をどこから持ってきたのだろうか？　それがわかれば、ことは簡単！　かも知れない。そう、この練習題Ⅰの 21 の文は、『マハーバーラタ』の中、有名な『ナラ王物語』の大団円に現れる以下の一節を踏まえて発想されたものである。ゴンダは、その rājan を mitra に変えている。「王よ」の代わりに「友よ」とである。A が「バーフカ（鎧［1989］だと Caland［1917］に従って一貫してヴァーフカ）」に姿を変えていたナラ王、B がリトゥパルナ王。そこには、詩節のけじめをつけるダンダしかない、句読点はいっさい使われていない。

sarvakāmaiḥ suvihitaḥ[23] sukham asmy uṣitas tvayi /

na tathā svagṛhe rājan yathā tava gṛhe sadā //（Mbh 3.76.15:Dandekar［1970］, p.487r, ll.22-23）

「私はあなたのもとで、すべての願望をよくかなえられ、快適に住んでいました。王よ。いつもあなた様のお館でのようには、己れの住処ではまいりません。」（鎧［1989］166 頁）

「私はあなたの所であらゆる望みが十分に叶えられて幸せに過ごしました。王よ、私の住家では、あなたの館で過ごすようにはとてもできません。」（北川・菱田［1999］237 頁）

「あなた様の許で、すべての望みも十分叶えられ、心楽しく過ごしてまいりました。王よ、自分の家においてさえ、いつもあなたの家におけるように快適ではありませんでした。」（上村［2002］215 頁）

ゴンダの『サンスクリット語初等文法』の「練習題」で、学生の頭を悩ますのは、練習題Ⅵの 8 番目ではないだろうか。

8. kauliko rātrau **samāyāto** rājaputryoktaḥ: tvayi jāmātari sthite śatrubhir jito me pitā.（106 頁）

「［その］織工（kaulika）が夜（rātri）にやって来た（samāyāta）ところ、王女（rājaputrī）によって、［次のように］言われた（ukta）。「あなた（tvad）が、［わたしの父王の］**婿（jāmātṛ）であった（sthita）時に**、わたしの（mama）父（pitṛ）は、敵（śatru）たちによって**征服されました（jita）**。」［と。］」（拙訳）

と訳を与えて、どういうことかと説明せざるを得ないのである。サンスクリット文の解読をこそ目指すわれわれは、どこまでも想像力を働かさなければなら

[23] 鎧訳の底本 Caland［1917］と北川・菱田訳の底本 Bühler［1888］では suvihitaiḥ となっている。

ない。あるテキストに基づいて映画作りを敢行する映画監督のように。この一文を成立させるような筋書きを考える必要がある。王女と身分の不釣り合いな一人の織工が恋仲になり、夜な夜な秘かに逢う瀬を重ねている。ある日、織工がいつものように、王女の許に忍んで行くと、王女が悲愴な顔をして言った。「先日、あなたが来て、楽しんでいた時に、遠く戦場にあったわたしの父＝王が、敵たちに攻められて、征服されてしまったのよ。」と。こんなところだろうか。王様ともども軍隊が打ち負かされてしまった国の王宮なら、もう至る所てんてこ舞いで、そもそもその夜の＜夜這い＞など可能なはずがない。どうも釈然としない練習題だ。処格絶対節を使った複文としてある王女の台詞の、下線部の従属節と、それに続く主節の関係は、どのようなものと考えるべきだろう。ゴンダ先生は、どこからこんな練習題を持ってきたのだろうか。サンスクリットの初学者ならずとも、相当に難解な一文ではないだろうか。試されているのは学生ではない、おそらく教師の側である。これに充分な説明を与えることができるかどうか。先の練習題Ⅰの 21 は、有名な『ナラ王物語』であった。この練習題Ⅵの 8 のソースは、なにか。

そこで『パンチャタントラ』である。『パンチャタントラ』を熟知の者なら、直ちに、次のような一節を引いてくることができる。田中於菟弥氏と上村勝彦氏による共訳、田中･上村［1980］、それと、それが底本とした Kielhorn［1896］があるので、それを引こう。第 1 巻の第 5 話である。ゴンダ本の「選文」風に表記するなら「パンチャタントラ 1,5」の一節である。

atha **tayā** sa **kauliko rātrau** savinayam **abhihitaḥ** / bhagavan **tvayi jāmātari sthite mama tāto** yac **chatrubhiḥ paribhūyate** tan na yuktam / tat prasādaṃ kṛtvā sarvāṃs tān vyāpādaya /（Kielhorn［1896］, p.39, ll.25-27）

「さて夜になると、織物師は王女によってつつましく言われた。

「尊いお方様、あなたが婿であるのに、妾の父が敵に征服されるのはよろしくありません。どうぞ力になってすべての敵を倒して下さい。」[24]」（田中・上村

[24]『パンチャタントラ』の和訳書として掛け替えのない田中･上村［1980］であるが、その「はしがき」に「この翻訳は最初の部分（第一・第二巻）は田中が、後半（第三～第五巻）は上村が担当した。」（1 頁）とあるように、この挿話 1,5 は、田中於菟弥氏（1903 ～ 1989）の担当である。田中氏はこの田中･上村［1980］に先だって、自分の翻訳の一部を、田中［1978］として、『大法輪』誌 45 巻（1978）の6 月号と 8 月号に掲載した。そして、田中氏の没後に刊行された田中［1991］には、その初出のものがそのまま再録されることになった。その

［1980］81 頁）

tatas **tayā** sa **kauliko rātrau samāyātaḥ** san savinayam **abhihitaḥ** / bhagavaṃs **tvayi jāmātari sthite mama tāto** yac **chatrubhiḥ paribhūyate** tan na yuktam / tataḥ prasādaṃ kṛtvā sarvāṃs tān śatrūn vyāpādaya /（Kosegarten［1848］, p.47, ll.1-3）

“Daraus wurde der Weber, als er in der Nacht zu ihr gekommen war, demutsvoll von ihr angeredet: „O Erhab’ner! es geziemt sich nicht, dass mein Vater, da du sein Schwiegersohn bist, von seinen Feinden überwaltigt wird. Drum ziege deune Huld und vernichte alle diese Feinde![25]“”（Benfey［1859］, p.53,ll.27-31）

“Puis, lorsque le tisserand vint la nuit, la princesse lui dit humblement : Vénérable, il n’ est pas convenable que mon père, quand tu es son gendre, soit vaincu par ses ennemis. Montre donc ta grâce et fais périr tous ces ennemis.”（Lancereau［1871］, p.61, ll.24-27）

tatas **tayā** sa **kauliko rātrau** savinayam **abhihitaḥ** ― ‘bhagavan, **tvayi jāmātari sthite mama tāto** yac **chatrubhiḥ paribhūyate** tan na yuktam / tat prasādaṃ kṛtvā sarvāṃs tāñ śatrūn vyāpādaya /’（Parab［1902］, p.42, ll.22-25）≒（Kale［1912//1986］, p.41, ll.10-13）

中に今問題にしている「ヴィシュヌ神になりすました織物師（小本第一巻第五話）」（67-76 頁）も含まれているのだが、田中［1978］と田中［1991］の問題の個所は、「さて夜になると、織物師**に**王女**は**つつましく**言われた**。／「尊いお方様、あなたが婿であるのに、妾の父が敵に征服されるのはよろしくありません。どうぞ**お**力になってすべての敵を倒して下さい。」」（72 頁）となっているのである。おわかりだろうか。田中・上村［1980］の「織物師は王女に言われた。」が、こちらでは「織物師に王女は言われた。」なのである。まるで笑い話のような誤解・誤記である。雑誌掲載時の訳者田中氏は、自身のいわば誤訳を、田中・上村［1980］で修正したのだが、没後の田中［1991］の中では、編者などが、原訳者の訳文を尊重して、そのまま収録してしまったということのようである。田中［1978］に出してしまったへんな尊敬語「言われた」を用いた能動文を、田中・上村［1980］で正規の受動文に修正して安堵した田中氏であったが、没後刊行の田中［1991］の中に、またへんな尊敬語「言われた」を用いたいまいましい能動文が復活してしまったということである。能動文をそのまま残すのであるならば、文体上は、「王女は言われた」ではなく、「王女は言った」とすべきだった。また、ここにある savinayam という副詞であるが、「つつましく」という訳語はいかがなものか。「織物師に王女は礼儀正しく言った。」、この場合の織物師は、王女などより圧倒的に偉いのである。田中氏がそれらの瑕疵に気づいて、田中・上村［1980］に収録する際に、「お力」の「お」を取るなどして、原文通りの受け身文に改変したのだったが、皮肉なものである。

[25] 原典使用のドイツ文字をこの引用においては通常使用の文字に換えてある。

そう、ゴンダ先生は、『パンチャタントラ』1,5 の「織工と王女」の挿話のこの一節をアレンジして練習題Ⅵの 8 を仕立てたのである。わたしは、ゴンダによって練習題に仕立てられた、王女の台詞を構成するこの「条件説と主節からなる一つの複文」は、入り組んだ原話を無視しての不合理な失敗作ではないかと考えている。いわば「ゴンダの不覚」ではないかと想像するのである。「身分違いの若い男と若い女の所詮適わぬ悲恋物語」に堕してしまった。『パンチャタントラ』1,5 の挿話との違いは、練習題では、「王女の父王が実際に征服された（死んだ？）」ことになるという点である。『パンチャタントラ』では征服もされないし死ぬこともない。むしろすべてにハッピーエンドが待っているのである。にもかかわらず、その条件節となる処格絶対節を用いての、“tvayi jāmātari sthite” は、そのまま使われているのである。「婿 jāmātṛ」（愛人とか恋人ではない）というのは嫁である「王女」にとっての呼称ではない。父王にとっての呼称である。つまり織工と王女は実質的に結婚している（＝ガンダルヴァ婚）のである。通常の見方からするならば、たかだか一介の「織工」が自分の娘の婿になったからといって、どの父王がその息子の活躍に期待することがあるだろうか。それが、悲劇的な結末（＝父王の敗戦死）を告げる主節の条件節に使われているのである。この条件節をどう解釈すればよいのか。文脈の助けの一切ない練習題の一複文である。せいぜいが、わたしが授業中に学生に対して示した程度の物語でお茶を濁さざるを得ないということである。どうせなら、あんな「切り取り・改変」を行わずに、“bhagavan, tvayi jāmātari sthite mama tāto yac chatrubhiḥ paribhūyate tan na yuktam.” を、そのまま使えばよかったのではないか。「世尊よ、あなたが［わたしの父＝王の］**婿であるのだから**、わたしの父［王］が敵たちによって征服されるのは**適当ではありません**[26]。」（拙訳）「世尊 bhagavat」、織工相手に用いられたこの呼称ひとつで、練習題を攻略しようとする必死の初学者には、わからないなりに、この織工が只者ではないこと

[26]『わしの娘がヴィシュニューさまの**お嫁なのに**、わしが大名たちから攻め立てられて**よいものか**。早くヴィシュニューさまにお話して、敵をみな殺しにしていただいておくれ。』（松村［1925］383 頁）サンスクリットの原文からの直訳ではなく、Benfey の独語訳などに基づく翻案、重訳と言うしかないものだが、「第五話　神のにせ者」と題された挿話、『パンチャタントラ』1,5 中の一節である。雰囲気はよく出ているのではないか。なお Benfey はこの挿話 1,5 を “Der Weber als Wischnu” と名づけている。田中･上村［1980］では「第五話　ヴィシュヌ神になりすました織物師」。これは Lancereau の “Le Tisserand qui se fit passer pour Vichnou” に倣ったものであろう。

が理解されるのではないか。そしてその典拠に通じている教師が、とくとくと講釈を垂れればよいのではないか。「この織工は単なる織工ではない、実は、ヴィシュヌ神の化身と考えられているのだよ」と。だから父王が敵と戦って征服されることなどあろう筈がない、どうぞ戦わざるを得ない父王を手助けしてもらえないだろうか」と続くのである。ゴンダは『パンチャタントラ』1,5 の或る意味では壮大なドラマを、お馬鹿な若い王女が、父王が戦場にあるというのに、織工ふぜいと夜な夜な乳繰り合っていた結果、父王が敗れて死んでしまった、という話に改変してしまったということである。

なお、ゴンダが使った『パンチャタントラ』は、どの版（刊本）かということであるが、詳細な議論はここでは省くが、わたしは、田中・上村［1980］の底本と同一のはずの Kielhorn［1869］（& Bühler［1868］）と考えている。ゴンダ本の「練習題」の後には、ご存じの通り、「選文」が収録されているが、そのⅠとⅡが『ヒトーパデーシャ』の 2,5 と 3,3、それに続くⅢとⅣとⅤに『パンチャタントラ』5,9 と 1,2 と 1,13 が収録されている。『ヒトーパデーシャ』の方の出典探しは難儀したが、前節では、なんとかそれを解明した。一方、同じ「選文」収録の『パンチャタントラ』の三つの挿話の方は、上記 Kielhorn& Bühler 本のものにすんなり決まりと言える。したがって、練習題Ⅵの第 8 文もそうと言えるかと思うのであるが、注意深い読者ならお気づきのように、練習題Ⅵの 8 には、主語の「織工 kaulika」の形容句として「やって来た samāyāta」が使われている。これは上に見た「タントラーキヤーイカー系」『パンチャタントラ』の小本の Kosegarten［1848］、Kielhorn［1869/1896］、Parab［1902］、Kale［1912/1986］の 4 つの刊本では、Kosegarten［1848］の特徴と言うべきものである。だがゴンダ先生が、各種『パンチャタントラ』の刊本に通じておられることは当然のことで、記念すべきドイツ語訳である Benfey［1859］やフランス語訳である Lancereau［1871］の底本となった Kosegarten［1848］を見ていないわけはないのである。ゴンダ先生が、状況を説明する形容句として「夜這いしてやって来た」を如実に表す samāyāta に注目したのは宜なるかな。また、どの原文にも用いられている王女の語る口調を修飾する副詞 savinayam は練習題を捻り出す際には不要として採用されなかった。確かに、あまりにも微妙な副詞である。これをどう解するかは初学者ならずとも大いに頭を悩ますところではないだろうか。『パンチャタントラ』中、興味深いことこの上ない 1,5 であるが、その仔細については、ここではこれまでとして触れない。ただその挿話に対するわ

たしの思いを以下の一節に託して、本節を閉じることとしたい。

「恋愛とは、カーマ神［の一部］が、その者の身体内に入り込んで、通常ならばその者にはない特別な力を付与して演じさせる神の遊戯」と規定することが出来るのではないか。

織工はヴィシュヌ神の化身を装って、王女を妻とする幸運を享受したが、真実が露見して悲惨な最期を遂げるはずの局面で、ヴィシュヌ神によって憑依されることによって、その危地にあって、人間離れした大活躍を為した結果、人生において最終的な至福を獲得したという話である。ヴィシュヌ神の方は、ヴィシュヌ神を騙る織工の存在によって、自身の面目を保持し得たばかりではなく、それをいっそう高めることに成功したのである。ヴィシュヌ教研究を得意としたゴンダにとっては、『パンチャタントラ』1,5 は、興味尽きない素材を提供する貴重な用例だったに違いない。その要となるのが、以下の部分である。

śrībhagavān āha / adya kauliko maraṇe kṛtaniścayo vihitaniyamo yuddhārthe vinirgataḥ / sa nūnaṃ pradhānakṣatriyaśarāhato nidhanam eṣyati / tasmin hate sarvo jano vadiṣyati yat prabhūtakṣatriyair militvā vāsudevo garuḍaś ca nipātitaḥ / tataḥ paraṃ loka āvayoḥ pūjāṃ na kariṣyati / **tatas tvaṃ drutataraṃ tatra dārumayagaruḍe saṃkramaṇaṃ kuru / aham api kaulikaśarīre praveśaṃ kariṣyāmi yena sa śatrūn vyāpādayati / tataś ca śatruvadhād āvayor māhātmyavṛddhiḥ syāt** /（Kielhorn［1896］, p.41, ll.4-11）

「尊い神が言った。

「織物師は今日死を決し、宣誓をして戦うために出発した。彼は必ずや最勝の武士たちの矢に打たれて死ぬであろう。彼が死んだなら、すべての人間は、『最勝の武士と戦ってヴァスデーヴァとガルダは死んだ』と言うであろう、然る時は、世界はわれらに対し尊敬をしなくなるであろう。**さればお前は急いで木で造ったガルダ鳥にのりうつりなさい。儂も織物師のからだにはいるから、それによって彼は敵を打ち破るであろう。そうすれば、敵を打破したことにより、われらの威徳は増大するであろう**」……」（田中・上村［1980］84 頁）

ゴンダの『サンスクリット語初等文法』の練習題Ⅵの 8 を生み出すことになった、この『パンチャタントラ』1,5 の挿話は、通常は「神の生れ変り／下生 avatāra」として説明される[27]「ヴィシュヌ神の化身」に対する、「ヴィシュヌ神

[27] むろん釈迦の誕生も、兜率天／都卒天にあった神の下生／降誕、化身 avatāra として説明

による憑依（既成の生き物の身体へののり移り・侵入 praveśa ／寄生）」に他ならないとの新解釈を可能とする恰好の用例と言えるのではないか。詳細は別攷に譲る。

Ⅲ．シュテンツラーの初等文法書とゴンダの初等文法書

サンスクリット語の初学者のための文法書には、練習題と選文は欠かせない。わたしは、何十年もそうした初学者を相手に授業を担当してきたが、自分でその手の文法書を書いてみようと考えたことはないのである。既に世の中には、ごまんとその手の文法書が存在している。また、次から次へと新たな文法書も刊行されている。従来の文法書に不満を覚え、その不備を改善しようとする奇特な方々が、その任に当たっているのだろうと思う。日本語で書かれたサンスクリット語の文法書も既に相当数に上る。仕事柄、新しいものが出ると、どうしても手にとってみたくなるが、授業で教科書として使うのは、相変わらずのゴンダの文法書、鎧［1974//1989］とランマンのサンスクリット読本、Lanman［1884//1963］だ。本年 2 月にインド在住も長い、当然ながらサンスクリット語もぺらぺらの石井裕さんの画期的な文法書がめでたく刊行された。ずいぶん前からその刊行の話は耳にしていたが、内容をうかがって、真っ先に石井さんに注文をつけたのは、その練習題が石井さんが独自に作成した、現代の生活にもフィットした文になっていることに対してだ。出版社の意向を反映したものだろうが、石井さんのサンスクリット語観にもよるのだろう。「サンスクリット語は死語などではない」という明確な立場[28]（これが「画期的な」という所

される。ヴィシュヌ神の十化身の一つに仏陀が数えられるに至ることも不思議でもなんでもない。人間業とは思えない数々の事蹟を残している例えばわれらが聖徳太子に関して「聖徳太子は確かに実在した」とか「聖徳太子はいなかった」とかの議論が日本史の世界では相変わらず喧しいが、これに対しても、聖徳太子と呼ばれ得る人物は確かに実在したが、その人物に折に触れて天上のとある神が憑依したとの解釈は行われないのだろうか。この『パンチャタントラ』1,5 に具体化している「ヴィシュヌ神憑依説」の圧倒的な利点は、従来の化身説が持つ「ヴィシュヌ神が化身している間はヴィシュヌ神が不在になり、長期に亘ってヴィシュヌ神自身の活躍が不可能となるという不都合から自由ということだろうか。優れた人間なら、四六時中ヴィシュヌ神のお世話にならずとも充分にやっていけると自負しているはずだからである。

[28] 上村・風間［2010］の上村勝彦と署名のある「まえがき」を改めて読んでみたら、上村さんが「南インドのマドラス（チェンナイ）に留学した。」（ii 頁）折のことに触れて、「ところが、ラガヴァン博士の周囲のパンディットとよばれる碩学たちは、英語を用いずに、流暢

以である）で文法書を新たに書き下ろした石井さんならではの練習題はむろん興味津々ではあるが、インドの古典研究を目指す初学者のための文法書であるならば、やはり練習題は、古典に取材したものであって欲しい、ということを率直に伝えたのである。今日サンスクリット語を学ぼうと思う学生は、サンスクリット語で会話をしたり、手紙を書いたり日記をつけようなどとは夢にも思わない。語学の勉強はいまいち苦手だけれど、仏教やインド哲学を勉強したり、『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』やカーリダーサの戯曲を読んだり、理解するためには、サンスクリット語が出来なくてはの思いから、なくなく勉強しようと志す者が大半なのではないだろうか。そうした観点に立つならば、やはり練習題は、すぐにも応用のきく、古典に取材したものであって欲しい、ということである。

サンスクリット語の初学者にとって、ランマンのサンスクリット読本で「ナラ王物語」を自在に読めるようになる、これが取りあえずの目標である。そのための第一歩としての初学者用の文法書はやはりゴンダ本、ということになる。あるいはドイツ語を苦にしない者なら、古来定評のある初等文法書、シュテンツラーの文法書も選択肢としてはありか。現に、わが国ではゴンダの文法書の和訳本が刊行されるまでは、このシュテンツラーの文法書を踏まえた荻原雲来［1916］がよく用いられたと聞く。荻原先生は、それに先だってシュテンツラーの文法書の和訳本そのものも『梵語入門』、荻原［1908］として刊行していたはずである。明治元年に Stenzler［1868］として初刊されたいわゆるこのシュテンツラー本だが、当初それには、練習題が用意されていなかったことは意外にもあまり知られていないのである。その後何度も版を重ねたが、そのシュテンツラー本に、選文に加えて練習題が備わるようになったのは、シュテンツラー没後の第 6 版、Stenzler［1892］からである。その改訂の任に当たったのは、あの有名なピシェル Richard Pischel である。それがさらに整備改訂された第 9 版、Stenzler［1915］を任されたのが、やはり有名なゲルトナー Karl Friedrich

なサンスクリットで議論をたたかわせていた。話には聞いていたが、サンスクリットは死語ではないことを実感した。欧米の優れた学者たちも、程度の差こそあれ、サンスクリットで会話できる。インド滞在中、米国の学者が、見事にサンスクリットを操ってパンディットたちをやりこめているのを目撃し、肝をつぶしたことがあった。」（ii 頁）とあったので、やはりそういうものかと改めて感心した。石井裕さんも先頃帰国するまではチェンナイに在住していたと聞く。

Geldner だった。その後も盛んに版を重ね、ヴェッツラー Albrecht Wezler による新訂の第 18 版、Stenzler［1995］に至り、最新のは確か第 19 版だと思うが、それだけは残念ながら未見である。有名な中国のインド学者季羨林による季羨林［1996］は、第 17 版、Stenzler［1980］を底本とした中国語訳のシュテンツラー本である。Söhnen［1992/1995］も、季羨林［1996］同様、第 17 版を底本とした英訳版である。さほどに、シュテンツラー本も現代に至るまで、大いに使われたサンスクリット語の初等文法書ということになる。ちなみに、荻原［1908］の底本は、ピシェルによる練習題の付加された第 6 版、Stenzler［1892］であり、その和訳版を踏まえて荻原先生によって独自に編纂されたのが荻原［1916］であるが、その練習題は基本的には、Stenzler［1892］を踏襲したものである。そして、シュテンツラー本の Stenzler［1995］に至るまでのその後の諸版やゴンダ本などを踏まえての、荻原［1916］の新訂版が、吹田［2015］である。シュテンツラー本とは言うものの、本論攷で、初等文法書のゴンダ本の練習題のルーツ探しをする際のシュテンツラー本とは、ピシェルによって創案された練習題を踏まえてゲルトナーによって加筆修正が為された Stenzler［1915］ということになる。そのゲルトナーの改訂（第 9 版）にあたっての前書きには、„Die Übungsbeispiele, deren Einführung ein Verdienst des unvergeßlichen Pischel ist, sind gesiebt und ergänz worden.“（p.III）とある。なお、わたしなどが長年お世話になっているゴンダ本は鎧［1974//1989］だが、それは未見の初刊本の Gonda［1941］を底本としたものではなく、その「訳者序」にある通り、第 3 版の Gonda［1948］を底本としたものである[29]。

わたしは教師の立場で文法書をあれこれ手にしてああだこうだと言うのだが、必死の覚悟でサンスクリットの勉強を始める人にとっては、とにかく何でもいい、文法書などは一冊あれば充分だと実は気楽に考えているのである。これと決めたらそれを攻略する他はない。良い教師の下、良い文法書を使って勉強したら、きっとすぐにもサンスクリット語のマスターになれる、というものではない。勉強する側に、かなり継続的に時間の余裕がある時でないと、サンスクリットを身につけることは難しいのではないかと常々思っている。サンス

[29] Gonda［1941］は未見だが、第 2 版の Gonda［1943］には、練習題も選文も、第 3 版の Gonda［1948］やそれを底本とする鎧［1974//1989］と基本的にほとんど変わることなく備わっている。前者を若干増広したのが後者と言える。第 4 版以降でどのように改訂されているのかについては未見のため、わからない。

クリット語をマスター出来るかどうかは、その者がどれだけ集中的に継続的に必死にサンスクリットに取り組めるかどうかにかかっているような気がする。文法事項などはどの文法書にも書いてあるはずだから、問題は、それを必死に理解し覚え込んで、それを実際のサンスクリット古典の読解に役立てることが出来るかどうかである。サンスクリットの習得の意義を認めて勉強を始めたはいいが、結局ものにならなかった人がけっこういるのではないか。年齢が行ってからサンスクリットの勉強を始めたはいいが、ものにならなかった、やはり若い時にやらなければ駄目か、といった泣き言もぼやきも時に耳にする。だが問題は年齢ではない、サンスクリットのマスターになるためには、どれだけ集中勉強が出来るかにかかっているのだと思う。とにかく、サンスクリットをマスターするには徹底的に机に向かわなければならない。どれだけ机に向かって勉強出来るかである。本の中にしか死語たるサンスクリットはないのである、と今はまあ呟いておこう。

前節では、ゴンダ本の練習題 V の 1.“na nāryo vinerṣyayā.” と 2.“striyo nisargād eva paṇḍitāḥ” にさりげなく触れただけで、それらの典拠にも訳にも言及しなかった。

「嫉妬（īrṣyā）なしに（vinā）女（nārī）［たち］があることはない（na）。」

「女（strī）［たち］は、まさに（eva）本性上（nisargāt）、学識がある／聡い→賢い（paṇḍita）。」

インドの論理学研究を目指す者には、重要な不変化辞、vinā と eva（と na）をうまく使った二つの文をうまく配置したゴンダ先生ならではの練習題と常々感心しているのであるが、ゴンダ先生は、さて、これをどこから発案したものだろうか。ある意味では、女性のネガティヴな側面をさりげなく捉えた V.1 と女性のポジティヴな側面をさりげなく捉えた V.2 を続けて配置したところに、ゴンダ先生のウィットを感じるのはひとりわたしばかりではないはずだ。

これまでのところ、ゴンダ本の練習題が、わたしなどの注文に応えるように、すべて古典に取材したもので、質量ともに充分に理想的であるように取り扱ってきたと思われるかもしれないが、詳しく見てみると、実のところ、どうやらそんなものでもないらしい。そこで本節では、ゴンダ先生による練習題に於ける二次資料からの流用（言葉は悪いが､パクリ？）という点に注目してみたい。つまり、ゴンダ本の練習題が（先生ご自身は、その本の中では何一つ説明していないが)、ゴンダ先生が直接にサンスクリット語の古典に取材して適宜アレ

ンジするなどして捻り出した練習題ばかりではない、ということである。先行する類似の初等文法書の練習題から、そのまま自分の文法書の練習題に採用したもの、あるいは、それでも自身の独自性を打ち出すべく、それらを適宜アレンジして採用した場合などが少なからずあると言いたいのである。初等文法書の練習題に関しては、その典拠を明示することなしの、こうした「無断借用」の類いは、盗用などとは言われないようである。初等文法書の性格上、教科書の練習題を活用する当の初学者にとってはそうした編著者の「煩瑣な申し開き」は、逆に願い下げということなのだろうか。練習題は短文（単文）であることが通例であるから、どうしてもどこか似てしまう、ならば「その点はお互いさま、大目に見よう」、いわば持ちつ持たれつの業界内の便利な不文律のようなものがあると考えるべきなのだろう[30]。

さて、前節でも話題にしたゴンダ本の V.1、V.2 といった二つの練習題のうちの後者、2 の方だが、これは岩本裕氏の全和訳もある有名な『土の小車』にその典拠を求めることが出来る。ベートリンクのあの『インド箴言集』にも収録されている有名なものだ。しかも『土の小車』のサンスクリット原典は、シュテンツラーの校訂による Stenzler［1847］が歴史的にもつとに名高い。

striyo hi nāma khalv etā **nisargād eva paṇḍitāḥ** /
puruṣāṇāṃ tu pāṇḍityaṃ śāstreṇaivopadiśyate //（Stenzler［1847］, p.64, ll.4-5）
striyo hi nāma khalv etā nisargād eva paṇḍitāḥ /
puruṣāṇāṃ tu pāṇḍityaṃ śāstrair evopadiśyate //19//（Karmarkar［1937//1950/2002］,

[30] 英語で書かれたものではあるが、充実したサンスクリット語初等文法書である Deshpande［1997］には、一枚の挟み込みの正誤表が付いている。その上部には、珍しいことに、著者による使用した「練習題」などのサンスクリット文についての説明文が掲げられている。
“**Note on the sources of Sanskrit materials in the book**：
The bulk of stories and exercises in this book are composed by the author, Madhav M. Deshpande. A few are direct quotations from classical works, and others are altered versions of classical passages modified to fit the level of grammar known to the student at a given point. The author has not consciously and deliberately excerpted examples from other Sanskrit textbooks. However, there will necessarily be a certain amount of shared examples. The author learned Sanskrit, since the age of ten, using a wide variety of teaching materials（in Marathi, Sanskrit, and English）, which has an enormous overlap in cited examples. As a result, it is not possible to attribute a given example to a specific published source. The author wishes to acknowledge his general indebtedness to all the teaching materials he has used over the years to acquire the knowledge of Sanskrit.”

p,118, ll.1-2）
“These women, to be sure,［are］indeed **clever** through［their］very nature; the **cleverness** of men, on the other hand, is imparted［to them］only by the［study of the］Śāstras.（19）”（Karmarkar［1937//1950/2002］, p,118, ll.16-18）
「女は生来**気転に長ず**。
　男の**学**は本から得らる。　（一九）」（岩本［1959］215 頁上）
　テキストのボールドにした部分が、ゴンダ本「練習題」の V.2 の文となっているのである。岩本訳はシュローカであることを踏まえて、この部分、例の 7･7 調の韻文訳で、なかなか気の利いた訳文になっている。だが、正確な意訳を心掛けたカルマルカルの英訳とは較ぶべきもない。原文の strī「女」が paṇḍita「賢い」（形容詞）、puruṣa「男」の pāṇḍitya「賢さ」を、それぞれ clever「賢い」と cleverness「賢さ」に当てたのに対して、岩本訳のなんだかわけのわからぬ「気転に長ず」と「学」では台無しなのではないだろうか。辻［1974］は、「第 23 章　名詞造語法」の中、「II Taddhita 接尾辞」「各説 12.-ya」で、「広範囲に名詞･形容詞を生み、中性の抽象名詞を作るときは一般に語頭の vṛddhi 化を伴う、……pāṇḍitya- n. ‘ 学識 ’: paṇḍita-‘ 学者 ’……」（220 頁）としているが、これもいかがなものか[31]。ベートリンクは、シュテンツラーのテキストに対して、以下のようにドイツ語訳を附している。
“Unsere Weiber sind ja schon von Natur **gelehrt**, während der Männer **Gelehrsamkeit** erst aus Büchern erlernt wird.”（Böhtlingk［1870-1873］, iii, p.533）

　ところで、荻原［1916］の新訂版を謳う近年の力作、吹田［2015］では、練習題にかなりの見直しがなされているようである。その「はじめに」には、以下のような説明がある。
「今回の新訂では中・上級文法に含まれる細則にこだわらず、むしろ実際の原典研究に必要となる実用性を心がけて増補を行った。それらは本文の増補だけ

[31]『土の小車』の一シュローカの前半を V.2 に仕立てた鎧［1974//1989］ではあるが、その語彙には、paṇḍita「学識ある、聡い」（166 頁）、pāṇḍitya「学識、賢慮」（165 頁）とある。あれ、ゴンダ本には pāṇḍitya という語は出て来ただろうかと思って調べてみたところ、鎧［1974//1989］の底本となる第 3 版の Gonda［1948］で増広された練習題の一番最後の XX.26 中に、atipāṇḍitya が現れる。したがって、第 2 版の Gonda［1943］の Glossar には、その pāṇḍitya は立項されていないのである。

でなく、【補】や脚注として補われている。また、他の多くの初級文法が解説を省く「名詞造語法」の章を拡張し、さらに、副詞・前置詞・接続詞・否定詞・間投詞を簡単に説明する「不変化詞」の章を加えることにした。そして、より体系的に理解できるようにいくつかの項目の順序を整理し、演習問題もそれにあわせて配置し直した。」（iii 頁）

下線部。ゴンダ本 V.1 と V.2 の練習題に関して吹田氏の編集方針を跡づけるならば、こういうことになる。荻原［1908］は、第 6 版である Stenzler［1892］の和訳であり、練習題 Übungsbeispiele に関しては基本的に同一である。荻原［1908］では本文末尾、「文抄」に先だってまとめて置かれた「演習例」がそれである。その荻原［1908］をさらに加筆修正して出来たものが荻原［1916］である。「演習例」は、「演習」に改められ、それぞれ、該当の文法の説明箇所の直後に移動されているが、練習題そのものは基本的に Stenzler［1892］、荻原［1908］、荻原［1916］は同じと言える。吹田［2015］は、「荻原雲来『実習梵語学』新訂版」と副題に謳っているように、基本的にはほぼ 100 年前に刊行された荻原［1916］を踏まえた上で、文法的説明などを増補改訂し、「演習」の内容・順番にも若干の修正が加えられている。今問題にしようとしているのは、Stenzler［1892］の練習題 II に相当する 16 個の単文である。その最後の第 16 番目が、ゴンダ本の以下の練習題 V.1 なのである。

na hi nāryo vinerṣyayā.（Stenzler［1892］荻原［1908］荻原［1916］II.16）（吹田［2015］II.14）（ゴンダ V.1）

一方、ゴンダ本の V.2 の方は、Stenzler［1892］荻原［1908］荻原［1916］にはなく、例えば大幅に改訂された第 9 版の Stenzler［1915］の III には、以下のように出現するのである。

na nāryo vinerṣyayā.（Stenzler［1915］III.10）（Stenzler［1892］荻原［1908］荻原［1916］II.16）（吹田［2015］II.14）（ゴンダ V.1）

asaṃtoṣaḥ śriyo mūlam.（Stenzler［1915］III.11）（Stenzler［1892］荻原［1908］荻原［1916］II.12）（吹田［2015］II.10）

striyo nisargād eva paṇḍitāḥ.（Stenzler［1915］III.12）（吹田［2015］II.15）（ゴンダ V.2）

いかが。これよりする限り、最新のものである吹田［2015］は荻原［1916］の新訂版ではあるが、当然ながらシュテンツラー本のそれ以後の諸版や、ゴンダ本を参考とした形で成立していることがわかるであろう。今問題にしている

ゴンダ本の V.1 と V.2 の並び方を吹田［2015］の II.14 と II.15 では、踏襲していると言い得るのではないだろうか。

ここで、例えば、『マハーバーラタ』他の有名インド古典の和訳者として知られる上村勝彦氏の没後刊行された上村・風間［2010］は、帯に「…最新・最高のサンスクリット語入門。」とあることからも、今問題にしているシュテンツラー本やゴンダ本と同様、サンスクリット語の初等文法書と見なすことが出来る。そして、今問題にしているその重要な要となるいわゆる「練習題」が、書物の各所に置かれた「例文」として多数収録されている点でも、興味深い。しかもシュテンツラー本やゴンダ本と共通のものや類似のものが少なからずあるという点でも誠に興味深いのである。語り出したら切りがないので、Stenzler［1915］、吹田［2015］、ゴンダ本に共通に現れると見たばかりの striyo nisargād eva paṇḍitāḥ. と類似のものが「第 4 章　名詞（形容詞）の格変化（4）」の「例文」の一つとして、しっかりとした和訳文、解説付きであがっているので、それに注目したい。以下のようにある。

「（4）striyo **hi nāma** nisargād eva paṇḍitāḥ.

ストリヨー・ヒ・ナーマ・ニサルガード・エーヴァ・パンディターハ

「実に女性は天性よりして賢い」

striyo は、strī の女性･主格･複数形。有声音の前で、-aḥ が -o となる。hi は、「というのは」の意味。あるいは、強めをあらわす。nāma も強め。nisargād は、nisarga「天性」（男性）の単数･奪格形。有声音の前で､-t は -d となる。eva は「まさしく、ただ」の意味で、強めの副詞。paṇḍitāḥ は、paṇḍita「賢い」の意味の形容詞（女性・主格・複数形）。」（37 頁）

いかが。シュテンツラー本やゴンダ本や吹田［2015］にはないボールド体の hi nāma が上村・風間本の特異な点である。たぶん、初等文法書の練習題としては「不向き・不要」と判断された、『土の小車』の元文の部分の一部が、除去されることなく残されたということなのであろう。共通の「ネタ文」から、サンスクリット語初等文法書の著者が、思い思いの事情から、自らの「練習題」を案出するものだ、ということの見事な例証になっていると思われる。おまけに、この上村・風間［2010］の場合は、有難いことに、訳例と各語の解説までがついている。だが、eva という不変化辞の役割を重視したいわたしなどからすれば、上村・風間［1910］のこの訳例は、まったくサンスクリット語初学者向きではないのではないか。例文を構成する各語が丁寧に解説されているにも

かかわらず、その結果としてある日本語による訳例がどうにも曖昧で不可解なのである。上村・風間［2010］では、「強め」という日本語で、やっかいきわまりない不変化辞などの意味・機能が表現されているようである。そしてそうした一つならぬ「強め」の意味の累積が、訳例の冒頭に置かれた「実に」に集約されていると考えられるのである。この、「実に」というのは、果たして何なんだろうか？　初学者はとまどってしまうのではないか。hi も nāma も eva も「強め」ということである。また、もしかしたら hi には「というのは」という意味も考えられるとある。「というのは」というのは何なんだろう？　なにか、hi という不変化辞には、『漢訳対照 梵和大辞典』には、「なぜならば」とか「真に、確かに、実に」などの意味があがっている（1556 頁）。hi にその「実に」という意味があるならば、訳例冒頭に置かれた「実に」というのは、その訳語なのだろうか？　だからこそ、シュテンツラー本の著者もゴンダ本の著者も、やっかいなものである hi も nāma も khalu も etā も省いて、ただ eva だけを練習題に残したのであろう、とわたしは考える。だが、上村・風間［2010］は、khalu と etā は省いたものの、hi や nāma や eva は、しっかりと残したのである。eva はよく avadhāraṇa-artha を持つと説明されるが、この avadhāraṇa-artha はよく「強調の意味」として処理される。だが、インドの伝統的な論理学書などにおける eva の使用法がこれまでにも何度も何度も論議されてきた。これは「強調」というよりは、むしろ「限定」の意味である。そして、この不変化辞の使用に当たっては、文中に於ける、その位置こそが大事であると言われてきたのではなかったか。したがって、それを含むサンスクリット文の解釈、訳例では、その限定が、どの語に対して機能しているかが明白となるような訳例こそが求められていたと思うのである。おそらく、上村・風間［2010］は、肝腎の主著者である上村氏が完成を前に逝去されたものである（本人の最終的な go サインのないままに刊行された著者不本意の？記念出版）ことを差し引いて考えるべきものであろう。だが、この訳例は、著者が仮に一流のサンスクリット梵語マスターであるとしても、梵文の翻訳は簡単ではないことを如実に伝えるものではないか。サンスクリット文法を一通り勉強した者が、梵文解読に当たって難儀するのは、文法規則の未習得・未習熟によるよりは、むしろサンスクリット古典を構成することになるサンスクリット語の単語の意味を確定し難いことによるところが大きいのではないか。わたしが、文法書などはなんでもいいと言いたくなるのは、そのように日頃実感することが多々あるせいだ。初等文法

の教師が心掛けるべきは、文法規則を正確にわかりやすく説明すること以上に、豊富な適切な練習題に対して的確な訳例を示してみせることなのではないか。やっかいなのは、目の前に様々な姿をとって立ちはだかる文を構成する諸単語の意味の確定である。辞典によってわれわれは意味に出逢うのだが、意味を確定する際には、決然と辞典を離れなければならないのだ。

《Stenzler［1915］と Gonda［1948］の練習題の比較》

yathā vṛkṣas tathā phalam.（S,I.1）

yathā vṛkṣas tathā phalam.（G,I.5）」

na gardhabho gāyati **śikṣito 'pi**.（S,II.4）

gardabho **na** gāyati.（G,XII.1）」

upadeśo mūrkhāṇāṃ prakopāya na śāntaye.（S,III.2）

upadeśo mūrkhāṇām asakṛt prakopāya.（G,I.5）」

śatrau sāntvaṃ pratīkāraḥ.（S,III.3）

śatrau sāntvaṃ pratīkāraḥ.（G,III.2）」

vṛthā vṛṣṭiḥ samudrasya **tṛptasya bhojanaṃ vṛthā**.（S,III.4）

vṛthā vṛṣṭiḥ samudrasya.（G,IV.5）」

saṃpatteś ca vipatteś ca daivam eva kāraṇam.（S,III.5）

saṃpatteś ca vipatteś ca daivam eva kāraṇam.（G,VI.5）」

vahnir eva **vahner** bheṣajam[32].（S,III.6）

agnir ev**āgner** bheṣajam.（G,III.5）」

śatror api **guṇā grāhyā doṣā vācyā** guror api.（ S,III.7）

śatror api **guṇān vaded doṣāṃś ca** guror api.（G,VI.6）」

dharmeṇa hīnāḥ paśubhiḥ samānāḥ.（S,III.8）

dharmeṇa hīnāḥ paśubhiḥ samānāḥ.（G,III.3）[33]」

na nāryo vinerṣyayā.（S,III.10）

---

[32] 上村・風間［2010］にも、同じ文が「第 3 章　名詞（形容詞）の格変化（3）」の例文（2）として採用されている（22 頁）。

[33] jñānaṃ narāṇām adhiko viśeṣo / jñānena hīnaḥ paśubhiḥ samānaḥ.（Schmidt［1888］, p.348）

「智慧こそは人間が第一の特徴にして、智慧なくしては獣と選ぶところなし。」（田中［1963］146 頁）

田中氏は、jñāna を「知識」ではなく、『法華経』（岩波文庫）の訳者、岩本裕氏同様、「智慧」と訳しておられる点が注目される。

na nāryo vinerṣyayā.（G,V.1）」
striyo nisargād eva paṇḍitāḥ.（S,III.12）
striyo nisargād eva paṇḍitāḥ.（G,V.2）」
bhartā **nāma** paraṃ nāryā bhūṣaṇam.（S,IV.2）
bhartā paraṃ nāryā bhūṣaṇam.（G,VI.1）」
amṛtaṃ durlabhaṃ nṝṇāṃ **devānām udakaṃ tathā,**
pitṝṇāṃ durlabhaḥ putras takraṃ śakrasya durlabham.（S,IV.6）
amṛtaṃ durlabhaṃ nṝṇām.（G,VI.4）」
yathā cittaṃ tathā vāco **yathā vācas tathā kriyāḥ.**（S,V.3）
yathā cittaṃ tathā vācaḥ.（G,VII.8）」
tṛṇaṃ **brahmavidaḥ** svargas tṛṇaṃ **śūrasya jīvitam.**（S,V.4）
svargo **brahmavidbhyas** tṛṇam.（G,VII.9）」
na jalaukasām aṅge jalaukā lagati.（S,V.11）
na jalaukasām aṅge jalaukā lagati.（G,VII.5）」
tyāgo guṇo vittavatāṃ **vittaṃ tyāgavatāṃ guṇāḥ.**（S,VI.2）
tyāgo guṇo vittavatām.（G,VIII.5）」

いかが。この比較より見る限り、これらの練習題に関しては、ゴンダは、ゴンダ本の練習題を案出するにあたって、直接に古典に取材したというよりは、シュテンツラーの練習題に取材して、それをそのまま採用したり、それを適宜アレンジした上で採用しているとも言い得るようである。

ここでは、サンスクリット語の初等文法書の練習題相互の間には、貸し借りが普通にあることの一具体例を示したまでで、他意はない。ゴンダ本の練習題は、先行するシュテンツラー本の諸版の練習題を典拠とすると考えられるものが少なからずあることは、以上の比較からも明らかになった。ゴンダがシュテンツラー本の練習題をそっくりそのまま採用しているものが少なからずあるばかりでなく、それを適宜アレンジしている（無理やり改変している）と思しきものも少なからずある。最最新の？石井裕氏の画期的なサンスクリット語初等文法書の練習題についてわたしの出したような要望、すなわち「出来たら練習題はゴンダ本などのように、古典作品に取材したものでお願いしたい」も、ここでのわたしのこうした作業の結果、なんだかひどく頼りないものに思えてき

たような気がする。「サンスクリット語は決して死語ではない[34]」という石井氏の主張もある意味ではもっともなものと言い得るし、言語はとことん生ものであるという意見などには返す言葉はないが、それは単語の意味は変わり得るという意味である。だからと言って、サンスクリット文を自分の好きなように捻り出して、単語に自分の好きなように意味を付与しても差し支えないということではない。サンスクリット文を解釈するに当たって「このサンスクリット文は、現代人の石井裕氏が作った文である、したがってこの文はこういう意味である」という視点を疎かにしていいものではないという点である。石井［2021］は確かに優れたサンスクリット語の初等文法書ではあるが、わたしにはどうしてもそれは Classical Sanskrit というよりはむしろ Contemporary Sanskrit の初等文法書であるという印象をぬぐい去ることが出来ないのである[35]。

[34] サンスクリット語の勉強を始めたころ、Nakamura［1973］を手にして、中村先生はやはり凄い先生だと思ったものである。が、恥ずかしながら、一度も通読することなく過ごしてきたのである。その青い薄っぺらな冊子の冒頭の Preface は、次のような一節で始まっている。“Sanskrit is not a dead language, but a living language, and since the independence of India it has gained its ground in the country. Tere is a strong movement to make Sanskrit the national language of India and Sanskrit education compulsory, although it has not yet been approved by others.”（p.iii）現在日常的に用いられるいわば現代用語のサンスクリット語対応語の立派な「語彙集」を用意し、現代のインドのパンディットなどのサンスクリット文からなる、立派な「現代サンスクリット選文集」までもが完備されている至れり尽くせりの素晴らしい書物である。中村先生によるいわば貴重なサンスクリット文法書であるが、中村先生は、見事に、明確に、それを Contemporary Sanskrit と規定しているのである。これは「現代サンスクリット語」と表現すべきものであろうが、当然ながら、それが「古典サンスクリット語」とは明確に区別すべきものであるとの意識に基づいたものであるだろう点が、今の場合、重要なのではないだろうか。

[35] サンスクリット語の文法規則に、古い、新しいがあるわけではない。問題は、そこで用いられる言葉／単語の古い、新しいを問題にせざるを得ないということである。「言葉は生もの」であるという観点よりするならば、それは「言葉の宿命」として否応もなく受け入れざるを得ないのだろうが、古典語なら古典語のままにしておけばいいものを、そこに不必要に新しい言葉（の意味）を導入することによって、古い言葉の意味が蔑ろにされ、不必要に風化してしまうことをわたしなどは畏れているのである。古い言葉の意味に通じていたいわゆるパンディットたち自身によって、古い言葉の意味が厳格に守られ、正しく伝承されていくべきところを、新しい文化文明に晒されたそのパンディットたち自身によって逆に古い言葉の意味が蔑ろにされ、ねじ曲げられていくという現実？を、わたしなどは深く畏れているのである。

むすびにかえて

本論攷は、石井本が刊行される遙か前に着手されたものだが、こうして一応の締めの部分を書きつつある、新年度も始まってもう随分と経つ現在は、当然ながら既にめでたく刊行されていて、わたしの手許にもしっかりとある。またしばらく前には、その売れ行きが好調のようで早くも増刷が決定したとの石井さんからのメールも届いている。わたしなどがその現代的な練習題はサンスクリット語初等文法書としてはいかがなものかと当初危惧していた点も売れ行き良好ということで、なんら瑕疵とはなっていないようである。とにかく素晴らしいサンスクリット語文法書の新たな誕生を心から祝福したい[36]。未だ手にしていない方々も是非とも手にとっていただきたいものだ。石井氏は、おそらく註記に引いた上村先生の記述にもあるような、非インド人でありながら、インドのパンディットなどとも高度な専門的な問題に関してサンスクリット語で自由にわたりあえる希有な日本人のお一人、インドの古典作品も次から次へと軽々と読みこなせる数少ない日本人のお一人である[37]。「極微文献学」というわ

---

[36] 石井本で一つだけ気になる点を指摘しておきたい。刊行後、初めて手にした時に、ふと目にとまったもので、たまたまやはりサンスクリット語をネイティヴとするような尊敬するK大のKさんへのメールのついでに簡単に伝えただけで、むろん石井さんにはまだ話していない。0 記号（数字としての 0）と現代の演算などで用いられる 0（数？）を、無暗に混同してサンスクリット語の文法書の中に「基数詞」として登場させたのは、いかがなものか。石井本は、「基数詞（0 ～ 99）」(078 頁）と明記し、その 0 を śūnya、1 を eka…と扱って憚らない点でも画期的である。0 がものを数え上げる時に用いる数ならば、その序数は何か？

また 0 個の数と結びつけられたそのモノは、単数なのか、両数なのか、それとも複数なのか。石井本の発行元の白水社の、語学の初等文法書のニューエクスプレスに先立つエクスプレス・シリーズの一冊、田中・町田［1986］がたまたま手許にあったので、見てみた。数詞は 94-95 頁、そして付録の 132-133 頁の二箇所で説明されているが、数字 0 の扱いは、慎重そのものである。Filliozat［1998］は、“**Principaux mots représentant les chiffres**：”（pp.203-210）と、数字についてしっかり説明しているものの、0 そのものを基数や序数の対象として論ずることはない。また Deshpande［1997］には、“**Formation of Larger Numbers**”（pp.290-291）の中で、大きな数を書きあらわす種々の方法を説明して、例えば、「1990」という数を表記する場合には、数字を並べて（the sequence of digits）、“śūnya-nava-nava-eka “0,9,9,1”” （p.290）や“kha-graha-graha-eka”（p.291）と書いたりするとあったりして、誠に興味深いが、むろん、0 を基数扱いすることはないのである。だが、この 0 の問題は、きわめて難しい問題を孕んでいるので、軽軽には論じられない。格調高い林［1993］の第一章を心して読みたいものである。

[37] 石井裕さんの文法書、石井［2021］の著者としての意気込みと抱負は、著書冒頭部に置かれた「はじめに」（003 頁）の中に明確に読み取ることが出来る。

けのわからぬ看板をぶら下げて、各国語辞典や各種文法書と首っ引きで、いつも先人諸賢の労作たる既訳のお世話になりながら、本だ、読書だ、解読だと、いつまでもひとりとぼとぼ暗い夜道を歩いているようなわが身がいやはやなんとも哀れに思えてならない昨今である。

【略号・参考文献】

Ainapure, Wasudevacharya
［1908］: *The Hitopadesa of Nārāyana Pandit with Various Reading*, Bombay.
Ballantyne, James R.
［1892］: *First Lessons in Sanskrit Grammar* (*5th Ed.*), London.
Benfey, Theodor
［1859］: *Pantschatantra*: *Fünf Bücher, indischer Fabeln, Märchen und Erzählungen*, Leipzig.
Bernstein, Georg Heinrich
［1823］: *Hitopadaesi Particula*,...,Vratislav.
Blatt, Heinrich
［1930］: *Nārāyaṇa*: *Hitopadesa, nach der nepalesischen Handschrift N,* Berlin.
Böhtlink, Otto
［1845］: *Sanskrit-Chrestomathie,* St.Petersberg.
［1870-73］: *Indische Sprüche. Sanskrit und Deutsch* (*2nd Ed.*), 3 vols, St.Petersburg.
［1877］: *Sanskrit-Chrestomathie* (*2nd Ed.*), St.Petersburg.
Bühler, Georg
［1868a］: *Panchatantra Ⅳ. & Ⅴ. <Bombay Sanskrit Series No. I.>*, Bombay.
［1868b］: *Panchatantra Ⅱ. & Ⅲ. <Bombay Sanskrit Series No. Ⅲ.>*, Bombay.
［1883］: *Leitfaden für den Elementarkursus des Sanskrit*, Wien.
［1888］: *Third Book of Sanskrit* (*3rd Ed.*), Bombay.
Caland, W.
［1917］: *Sāvitrī und Nala*: *Zwei Episoden aus dem Mahābhārata,* Utrecht.
Dandekar, R.N.
［1971］: *The Mahābhārata*: *Text as Constituted in Its Critical Edition, Vol.I*, Poona.
Deshpande, Madhav M.
［1997］: *Saṃskṛtasubodhinī*: *A Sanskrit Primer*, Ann Arbor.
Dravid, B.T. (=Iyar, Sheshadri)
［1906］: *English Translation of Hitopadesha* (*2nd Ed*), Bombay.
Fick, Richard
［1891/1922］: *Praktische Grammatik der Sanskrit-Sprache für den Selbstunterricht* (*4th Ed.*), Wien & Leipzig.
Filliozat, Vasundhara
［1998］: *Élémentes de Grammaire Sanskrite, Gīrvāṇa-bhāṣā* (*La Langue des Dieux*), Palaiseau.
Ford, Gordon B.,Jr.
［1966］: *A Concise Elementary Grammar of the Sanskrit Language by Jan Gonda*, Leiden.
Garbe, Richard
［1909］: *Otto Böhtlingk's Sanskrit-Chrestomathie* (*3rd Ed.*), Leipzig.
Gonda, J. (1905 ～ 1991)
［1941］: *Kurze Elementar-Grammatik der Sanskrit-Sprache. Mit Übungsbeispielen, Lesestücken und einem Glossar*, Leiden.
［1943］: *Kurze Elementar-Grammatik der Sanskrit-Sprache. Mit Übungsbeispielen, Lesestücken und einem Glossar.* (*2nd Ed.*), Leiden.
［1948］: *Kurze Elementar-Grammatik der Sanskrit-Sprache. Mit Übungsbeispielen, Lesestücken und*

einem Glossar. (*3rd Ed.*), Leiden.
Johnson, Francis
[1847]:*Hitopadeśa. The Sanskrit Text, with A grammatical Analysis*, London & Hertford.
[1848]:*Hitopadeśa or salutary Counsels of Vishnu Śarman, in A Series of Connected Fables, Interpreted with Moral, Prudential, and Poitical Maxims*, London & Hertford.
Jones, William
[1807]:*Works of Sir William Jones, Vol.13*, London.
Kāle, M.R.
[1896,1910//1976]:*Hitopadeśa of Nārāyaṇa*, Delhi,etc.
[1912//1986]:*Pañcatantra of Viṣṇuśarman, Delhi.*
[1924//1962/1982]:*The Mrichchhakatika of Sudrraka*, Delhi,etc.
Karmarkar, R. D.
[1937//1950/2002]:*Mṛcchakaṭika of Śūdraka*, Delhi.
Kielhorn, F.
[1869]:*Panchatantra I.<Bombay Sanskrit Series No. IV.>*, Bombay.
[1896]:*Panchatantra I.* (*6th Ed.*), Bombay.
Kosegarten, J.G.L.
[1848]:*Pantschatantrum sive quinque partitum de moribus exponens...*, Bonnae ad Rhenum.
Lakshami Nārāyan Nyālankār
[1830]:*The Hitopadesha:A Collection of Fables and Tales in Sanscrit by Vishnusarmā. With the Bengali and the English Translations Revised*, Calcutta.
Lancereau, Édouard
[1855]:*Hitopadésa ou L'Instruction Utile...*, Paris.
[1871]:*Pantchatantra ou Cinq Livres*, Paris.
[1871//1965]:*Pañcatantra*, n.p.
Lanman, Charles Rockwell
[1884//1963]:*A Sanskrit Reader, Text and Vocabulary and Notes*, Cambridge, Massachusetts.
Müller, Max
[1844]:*Hitopadeśa.Eine alte indische Fabersammlung aus dem Sanskrit zum ersten Mal in das Deutsche übers.*, Leipzig.
[1864]:*The First Book of the Hitopadeśa:Containing The Sanskrit Text, with Interlinear Translation, Grammatical Analysis, and English Translation*,London.
[1865]:*The Second, Third, and Fourth Books of the Hitopadeśa:Containing the Sanskrit Text, with Interlinear Translation*, London.
Nakamura Hajime
[1973]:*A Companion to Contemporary Sanskrit*, Delhi.
Nazari, Oreste
[1896]:*Lo Hitopadeça o Buono Ammaestramento di Nārāyan*a, Torino.
Parab, Kāśīnāth Pāṇḍurang
[1902]:*The Pañchatantraka of Vishṇuśarman with Explanatory English Notes*, Bombay.
Peterson, Peter
[1887//1986/1999]:*Hitopadeśa* (*Complete*) , *Text with Introduction and Notes in English*, Delhi.
Pincott, Frederic
[1880]:*Hitopadesa. A New Literal Translation from the Sanskrit Text of Prof. F. Johnson for the Use of Students*, London.
Sathe, J.D.,etc.
[2012]:*An Encyclopaedic Dictionary of Sanskrit on Historical Principles*,Vol.28, Pune.
Schlegel, August Wilhelm (1767-1829) & Lassen, Christian (1800-1876)
[1829-30]:*Hitopadesas id est Institutio Salutaris...*, 2 Parts, Bonnae ad Rhenum.
Schmidt, Richard
[1888]:*Der Textus ornatior der Śukasaptati, Kritisch Herausgegeben*, München.
[1889]:*Die Śukasaptati* (*textus ornatior*), *Aus dem Sanskrit uebersetzt*, Stuttgart.

［1896］:*Der Textus ornatior der Çukasaptati, Ein Beitrag zur Märchenkunde*, Stuttgart.
Schoenberg, J.
［1884］:*Der Hitopadescha. Altindische Märchen und Sprüche*, Wien.
Shripati Awasthi
［2005］:*Hitopadeśa* (*Sanskrit Text with English Translation, Notes and Index of Verses*) *Translated into English by M.R. Kale*, Delhi.
Söhnen, Renate
［1992/1995］:*A. F. Stenzler*:*Primer of the Sanskrit Language* ［*17th Ed.*］,*Translated into English with Some Revision*, London.
Stchoupak, N. , Nitti, L. & Renou, L.
［1980］:*Dictionnaire Sanskrit-Français*, Paris.
Stenzler, Adolf Friedrich (1807 ～ 1887)
［1847］:*Mṛcchakaṭikā*....., Bonn.
［1868］:*Elementarbuch der Sanskrit-Sprache.Grammatik,Texte,Wörterbuch*, Breslau.
［1892］:*Elementarbuch der Sanskrit-Sprache.Grammatik,Texte,Wörterbuch.* (*6th Ed.*), Breslau.
…Richard Pischel (1849 ～ 1908)
［1915］:*Elementarbuch der Sanskrit-Sprache* (*Grammatik─Texte─Wörterbuch*) (*9th Ed.*), Giessen.
…Karl F. Geldner (1852 ～ 1929)
［1995］:*Elementarbuch der Sanskrit-Sprache.Grammatik,Texte,Wörterbuch.* (*18th Ed.*), Berlin & New York.　…Albrecht Wezler (1938 ～)
Törzsök, Judit
［2007］:*"Friendly Advice" by Nārāyaṇa & "King Vikrama's Adventures"*, n.p.
Wilkins, Charles
［1787//1885］:*Fables and Proverbs from the Sanskrit Being Hitopadesa*, London.

石井裕
［2021］：著『ニューエクスプレスプラス　サンスクリット語（CD 付）』白水社
泉芳璟
［1944］：著『入門サンスクリット』三笠書房
岩本裕
［1959］：訳「土の小車」『インド集』＜世界文學体系 4 ＞筑摩書房
荻原雲来
［1908］：訳補『梵語入門 文法・文抄・字書』（ステンツラー著）丙午出版社
［1916］：著『實習梵語學 文法・書法・文抄・字書』丙午出版社
金倉圓照・北川秀則
［1968］：訳『ヒトーパデーシャ』岩波文庫
金沢篤
［1998］：「カーマの矢―インド愛神考序説―」『駒大佛教學部研究紀要』第 56 号
［2007］：「蓮の眼（1）―ラーマの形象表現を手がかりに―」『駒大佛教学部研究紀要』第 65 号
［2020］：「aputra 考、またはベートリンクの不覚？」『駒大佛教學部論集』第 51 号
上村勝彦
［2002］：訳『原典訳 マハーバーラタ 3』ちくま学芸文庫
上村勝彦・風間喜代三
［2010］：著『サンスクリット語・その形と心』三省堂
季羨林
［1996］：訳『梵文基础读本』（A.F. 斯坦茨勒 著：17th Ed.）北京
北川秀則・菱田邦男
［1999］：訳『古代インドの叙事詩 ナラ王物語とサーヴィトリー姫物語』山喜房仏書林
榊亮三郎
［1907］：著『解説 梵語学』眞言宗高等中學
［1947］：著『弘法大師と其の時代』＜日本文化名著選＞創元社
［1980］：著『榊亮三郎論集』国書刊行会

辻直四郎
［1973］：訳『サンスクリット文学史』岩波全書
田中於菟弥
［1963］：訳『鸚鵡七十話』東洋文庫
［1967］：訳『インドの文学』＜世界の文学 9＞明治書院
［1978］：「成人のためのパンチャタントラ（1）（2）」『大法輪』45-6&8
［1991］：著『インド・色好みの構造』春秋社
田中於菟弥・上村勝彦
［1980］：訳『パンチャタントラ』＜アジアの民話 12 ＞大日本絵画
田中敏雄・町田和彦
［1986］：著『エクスプレス　ヒンディー語』白水社
辻直四郎
［1974］：著『サンスクリット文法』岩波全書
林隆夫
［1949］：著『インドの数学　ゼロの発明』中公新書
平松友嗣
［1956］：訳『ひとーぱでーしゃ』理想社
吹田隆道
［2015］：編著『実習サンスクリット文法―荻原雲来『実習梵語学』新訂版』春秋社
松村武雄
［1925］：訳『世界童話体系 第十巻 印度篇』世界童話体系刊行會
鎧淳
［1974//1989］：訳『J・ゴンダ：サンスクリット語初等文法』春秋社
［1989］：訳『マハーバーラタ ナラ王物語』岩波文庫

【キーワード】サンスクリット語初等文法書、ゴンダ、シュテンツラー、
極微文献学、ヴィシュヌ、説話文学